令和６年２月１２日(月・祝)

利根川の河道変遷から見た越谷

NPO法人越谷市郷土研究会
秦野　秀明

令和６年２月１２日（月・祝）

中川低地を流れる利根川の河道変遷に基づき

越谷周辺の歴史と地理について

読み解いていきます。

NPO法人越谷市郷土研究会
秦野　秀明

SURIBACHI 高低差散策を楽しむバイブル

埼玉
凸凹地図

1:10,000＆1:30,000



[窪地・谷間]
スリバチ×
川跡・排水路跡
上水・用水路跡
古道・旧道／坂／階段

起伏の細部まで緻密に再現！

埼玉の
地形を徹底的に記した、
画期的地図！

アイコン表示
●湧水スポット ●石碑・石仏
●板碑 ●城跡・館跡・陣屋跡
●古墳 ●貝塚 ●河岸跡
●ビュースポット ●河畔砂丘

昭文社

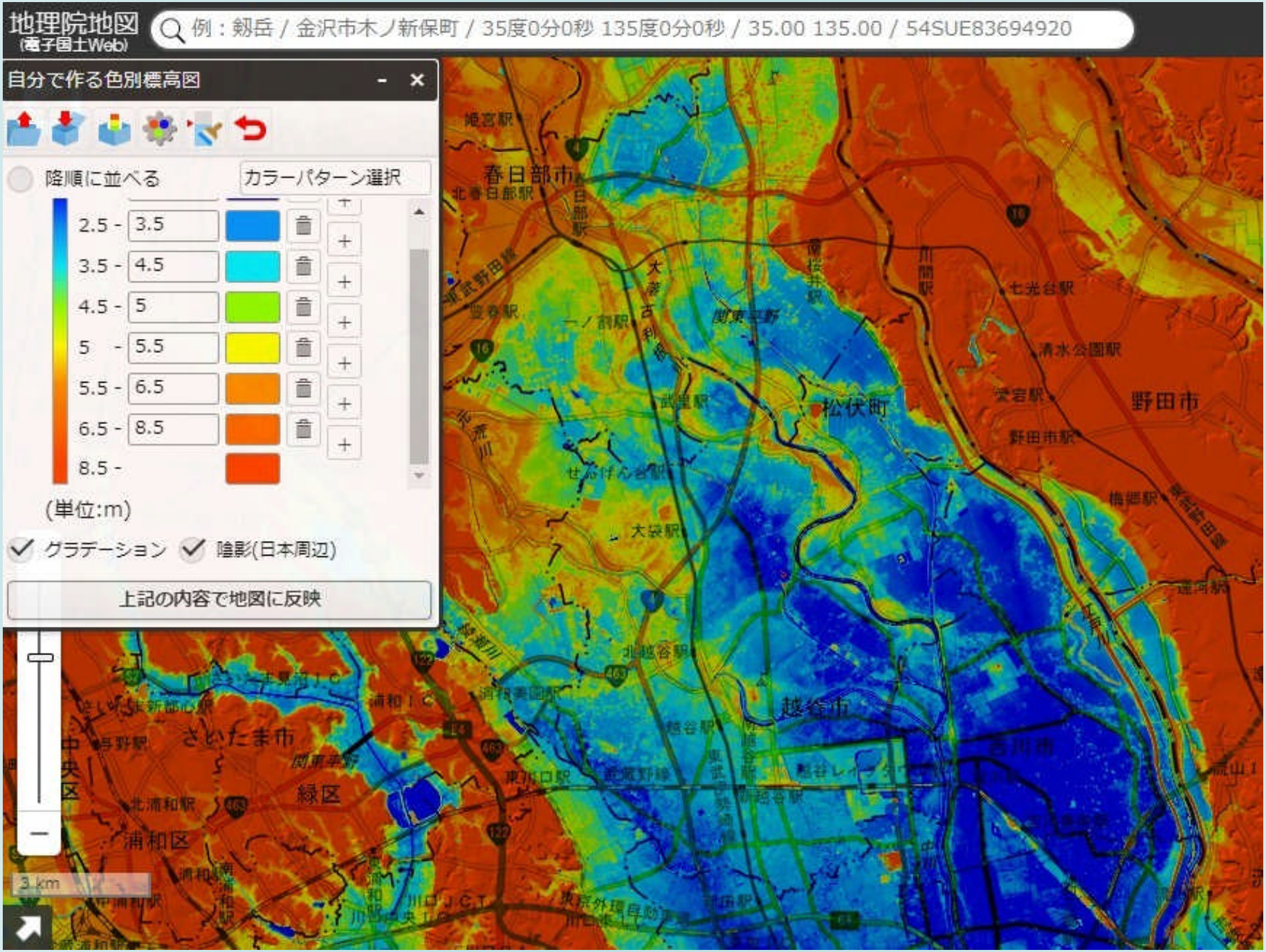
出典：

秦野 秀明 他 監修(2022)

『埼玉凸凹地図』

昭文社

より引用

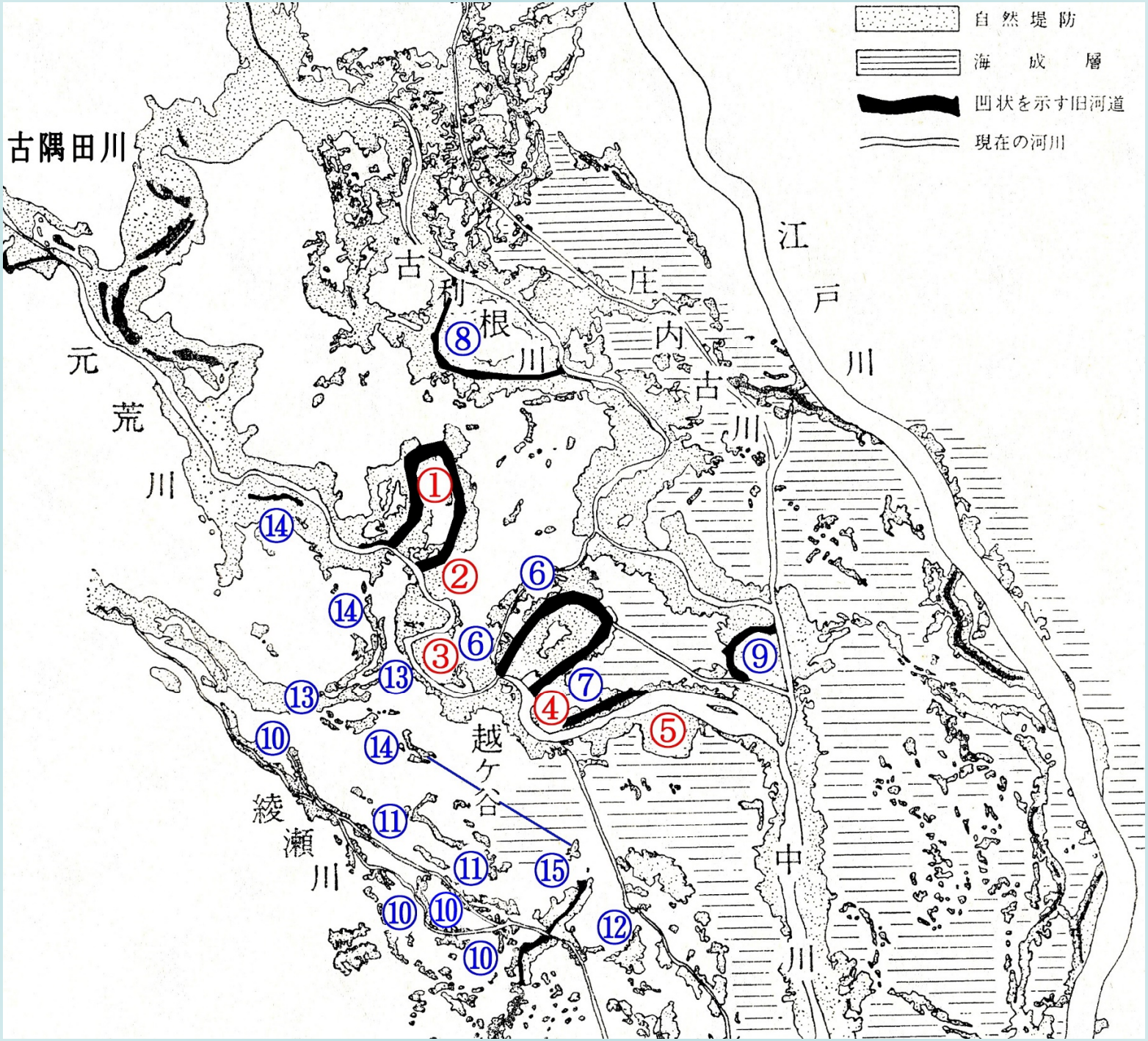

地理院地図
(電子国土Web)
例：剱岳 / 金沢市木ノ新保町 / 35度0分0秒 135度0分0秒 / 35.00 135.00 / 54SUE83694920
自分で作る色別標高図
降順に並べる
カラーパターン選択
2.5 - 3.5
3.5 - 4.5
4.5 - 5
5 - 5.5
5.5 - 6.5
6.5 - 8.5
8.5 -
(単位:m)
グラデーション
陰影(日本周辺)
上記の内容で地図に反映
春日部市
松伏町
野田市
越谷市
さいたま市
緑区
浦和区
中央区
3 km

出典：

「地理院地図(電子国土Wwb)」

＞「自分で作る色別標高図」

より　引用


自然堤防
海成層
凹状を示す旧河道
現在の河川
古隅田川
元荒川
古利根川
庄内古川
江戸川
中川
綾瀬川
越ヶ谷
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮

出典：

新井 鎮久(1975)

「第16図

中川水系流域(中流部)における

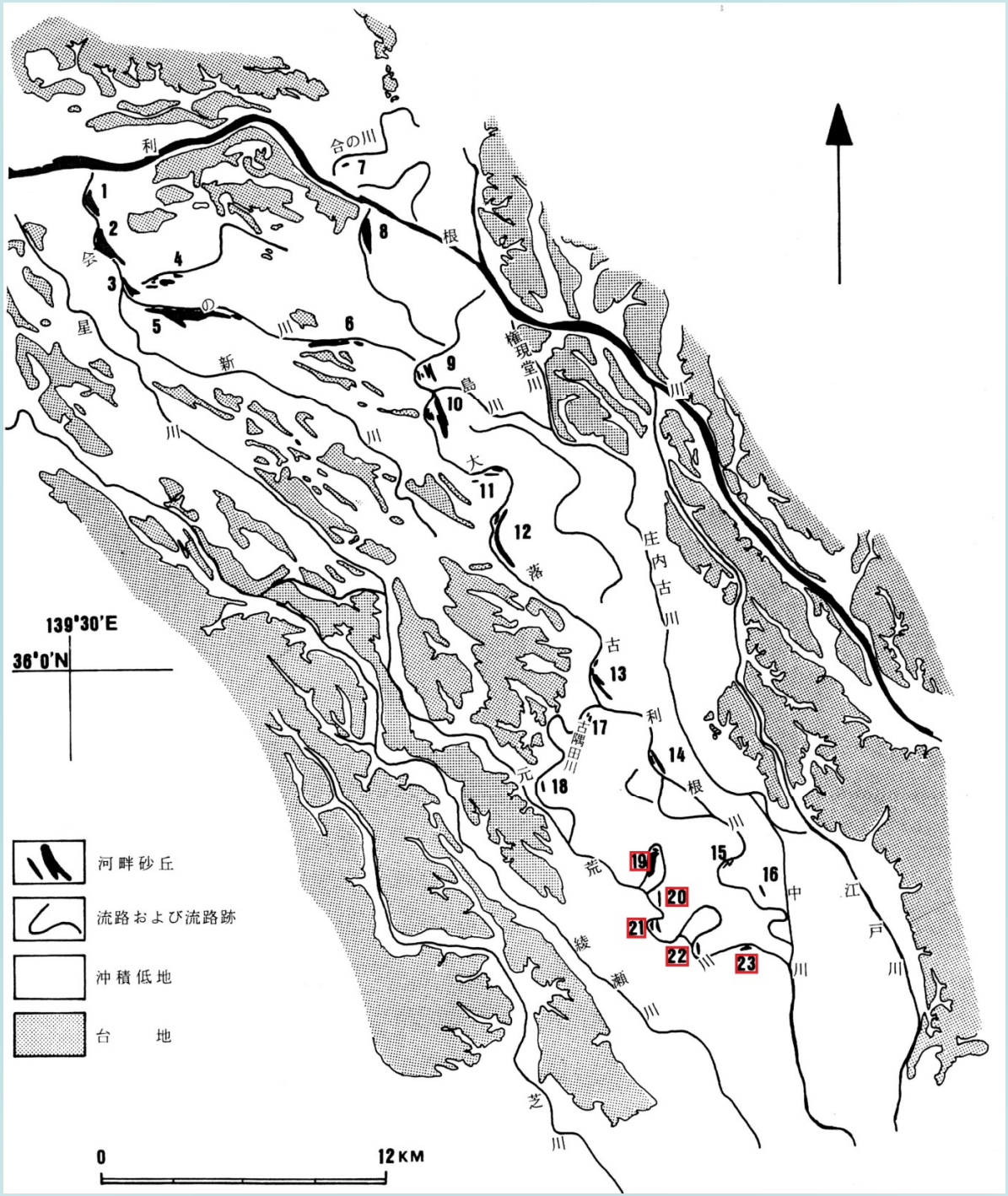
自然堤防の分布

(国土地理院洪水地型分類図による)」

『越谷市史 第一巻 通史上』

越谷市役所 p. 52

より 引用・加筆


利
合の川
根
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
新
川
大
島
川
権現堂川
庄内古川
古利根川
元荒川
綾瀬川
中川
江戸川
芝川
139°30'E
36°0'N
河畔砂丘
流路および流路跡
沖積低地
台地
0
12KM

出典：

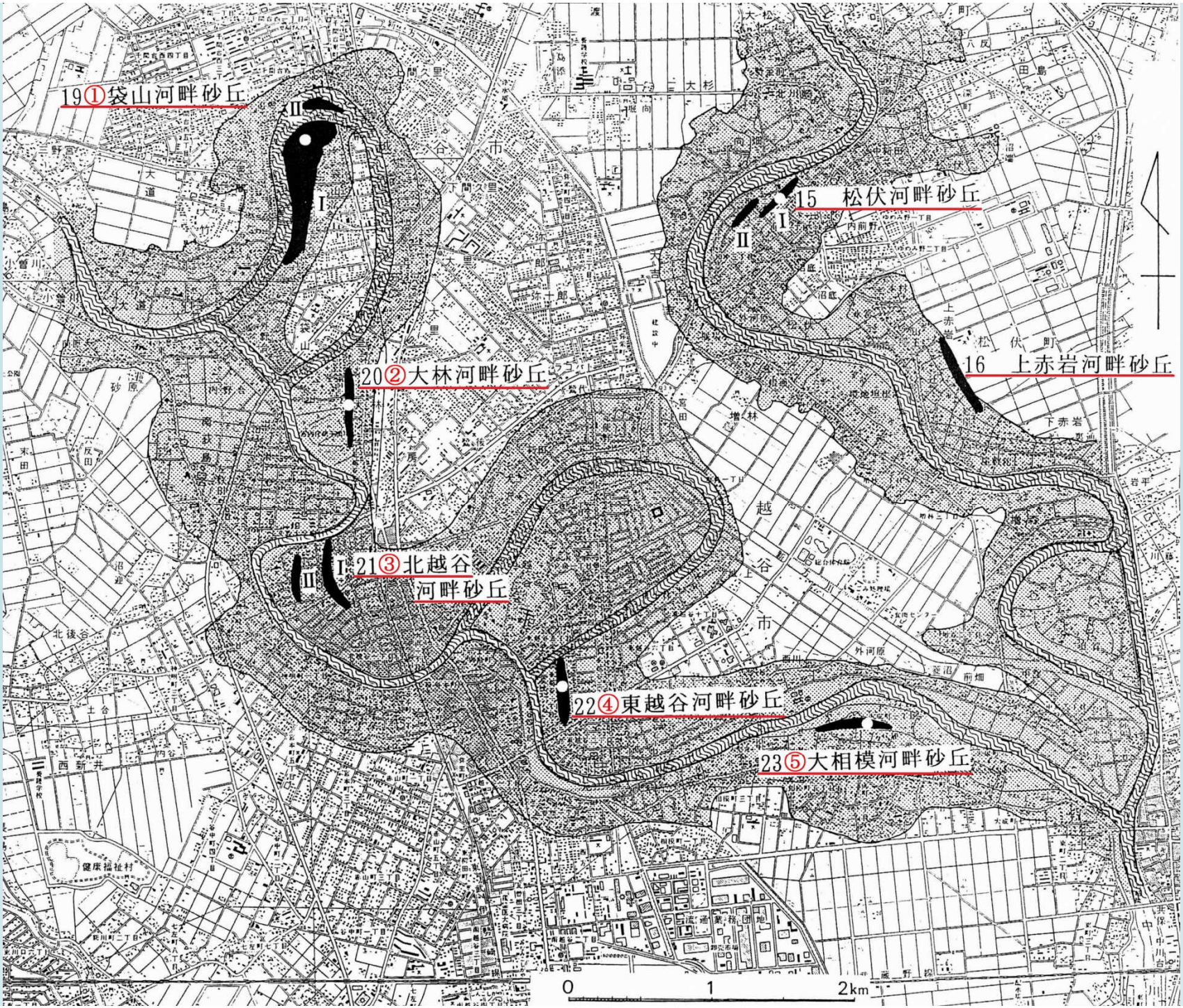
「河畔砂丘の分布図」

平社定夫・佐藤和平(1993)

『中川水系　Ⅰ総論・Ⅱ自然』

埼玉県 p. 84

より　引用・加筆


19①袋山河畔砂丘
20②大林河畔砂丘
21③北越谷河畔砂丘
22④東越谷河畔砂丘
23⑤大相模河畔砂丘
15 松伏河畔砂丘
16 上赤岩河畔砂丘
I
II
0
1
2km

出典：

平社定夫・佐藤和平(1993)

「越谷市と松伏町の

河畔砂丘と周辺の地形」

『中川水系　Ⅰ総論・Ⅱ自然』

埼玉県 p. 94

より　引用・加筆



迅速測図にみる古隅田川と周辺地形（1993 堀口原図）

出典：

新井 壽郎・小野 文雄・高橋 一夫・

武井 尚・堀口 萬吉(1994)

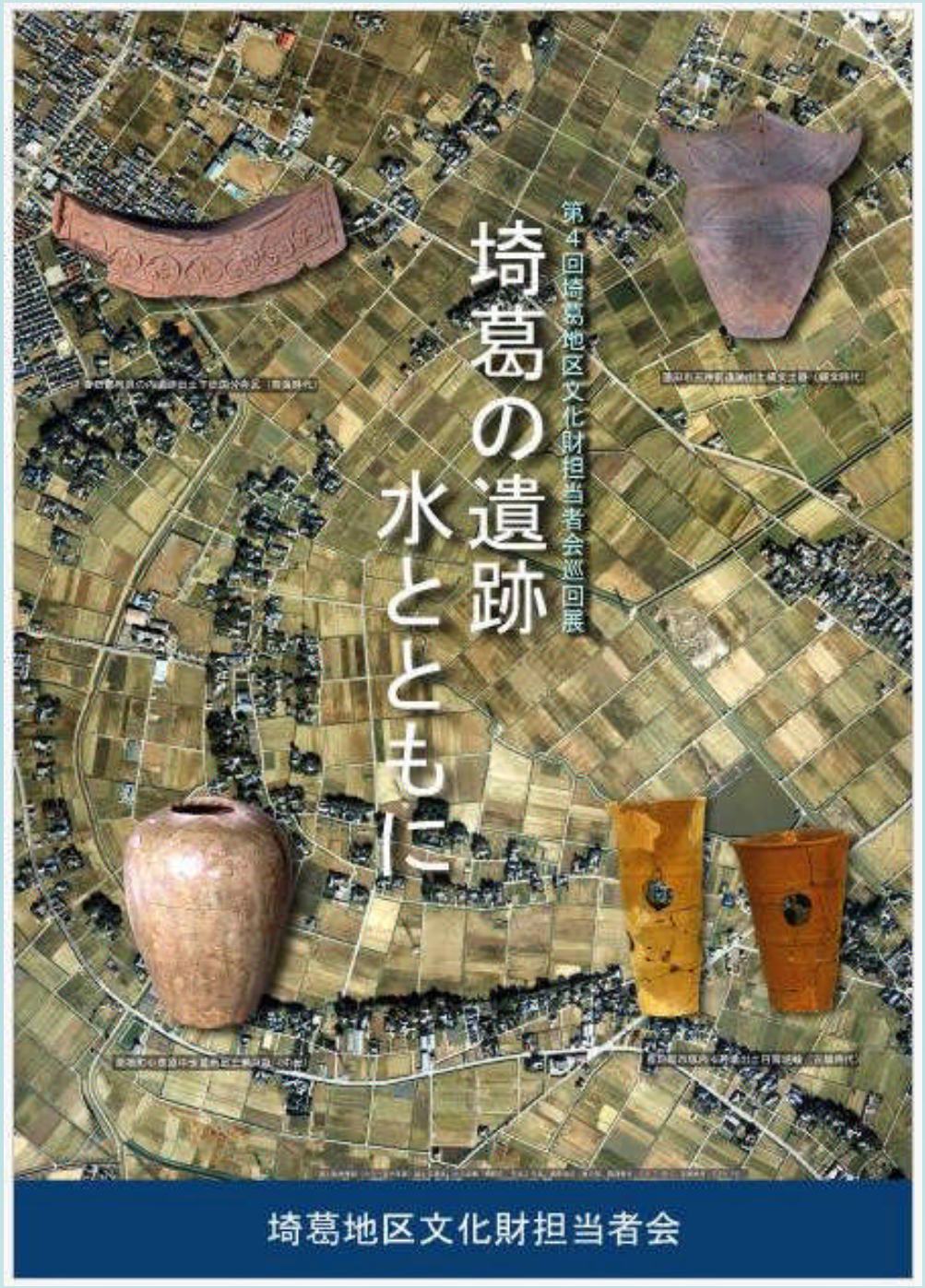
「座談会「古代・中世の中川流域を探る」

～利根川・古隅田川の流路を中心として」

『埼玉県史研究』第29号

埼玉県 p. 11

より 引用


第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
埼葛の遺跡
水とともに
埼葛地区文化財担当者会

出典：

田中 和之(2008)

第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展

「埼葛の遺跡 水とともに」

埼葛地区文化財担当者会

pp. 1-26

より 引用

「埼葛」の名称の由来
１／９

埼玉県の東部に位置
南埼玉郡と北葛飾郡に属していた市町から構成
各郡名の頭文字を取ってこの名称を使用

南埼玉郡市
鷲宮町の一部・菖蒲町・久喜市・白岡町・蓮田市・
宮代町・春日部市の一部・旧岩槻市・越谷市・八潮市
北葛飾郡市
栗橋町・鷲宮町の一部・幸手市・杉戸町・
春日部市の一部・旧庄和町・松伏町・吉川市・三郷市
計17市町

「埼葛」の名称の由来
２／９

平成17年(2005)4月
　旧岩槻市はさいたま市と合併してさいたま市岩槻区
平成17年(2005)10月
　旧庄和町は春日部市と合併して新たな春日部市
現在は計15市町

「埼葛」の名称の由来
３／９

大化2(646)年正月
　「改新之詔」公布
　「国評(こおり)里制」促進
大宝元(701)年
　「大宝律令」制定
　「国郡里制」施行
霊亀元年(715)年
　里は郷(ごう)と改称(「郷里制」)
※天武天皇13年10月14日(ユリウス暦684年11月26日)
　「南海トラフの巨大地震」と推定(確実な記録として最古)

「埼葛」の名称の由来
４／９

近世「下総国葛飾郡庄内領」は
中世から近世にかけて下総国から武蔵国へ編入された
旧 利根川本流左岸の葛飾郡の中で
近代に入った明治8年(1875)
千葉県から埼玉県に移管(注1)
明治8年(1875)は「大区小区制」(注2)の施行中
明治12年(1879)3月17日
「郡区町村編制法」(注3)施行(注4)以降に
この移管された地域が「中葛飾郡」として発足(注5)
明治29年(1896)4月1日
「北葛飾郡」の一部として発足(注6)

「埼葛」の名称の由来
５／９

明治8年(1875)

「旧 中葛飾郡」の郡域が
千葉県から埼玉県に移管されたと言い換えると判りやすい

「旧 中葛飾郡」の西は
凡そ当時の「庄内古川」の河道を以て境界を画していた
旧 中葛飾郡椿村(現 北葛飾郡杉戸町椿(つばき))付近
より北
「中島用水」
(※利根川東遷論で使用する用語の「庄内古川(新川)」)
の河道を以て境界を画していた

「埼葛」の名称の由来
６／９

(注1) (注4) (注5) (注6)
　出典調査中(出典がWikipediaのみ)
(注2)出典：
　「(明治5年(1872)10月10日(11月10日)大蔵省達第146号)」
　「大蔵省達第146号 区長副区長ヲ置キ
　 給料ハ民費ニ課セシメ府県死亡表様式ヲ頒ツ」
　『法令全書』明治5年 内閣官報局 1887年
　https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787952/403
　https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787952/404

「埼葛」の名称の由来
７／９

(注3)出典：

「太政官布告第17号 郡区町村編制法」

『法令全書』明治11年 内閣官報局 1887年

https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787958/38

https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787958/39

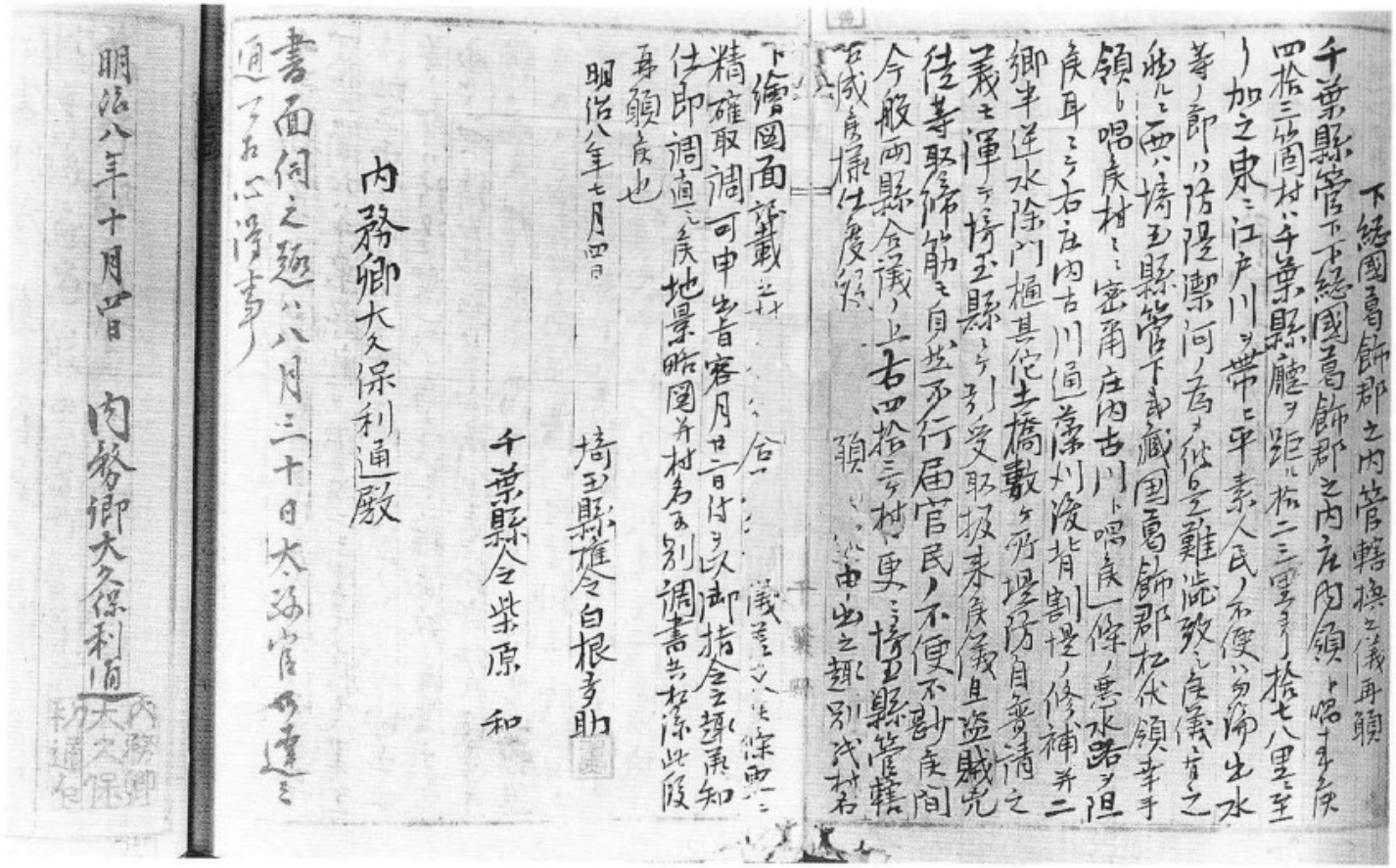
「埼葛」の名称の由来
８／９

※旧 中葛飾郡椿村
　(現 北葛飾郡杉戸町椿(つばき))付近より北の
　「現 中川」の河道は
　「庄内古川(古川)」を再利用した

昭和3年(1928)の
旧 内務省直轄事業である
「吉田村新水路」の竣工により確定

「埼葛」の名称の由来
９／９

明治8年(1875)
「下総三分割」における
「近世・庄内領」の地域の
千葉県から埼玉県への移管は「合議」
(注7)



明治８　下総国葛飾郡之内管轄換之儀再願
（行政文書　明3679）

埼玉県と千葉県が合議の上、千葉県の管下にある庄内領43ヶ村の埼玉県への管轄換を願い出たときのものである。８月30日の太政官達によりこの願が受け入れられたことがわかる。

(注7) 出典：

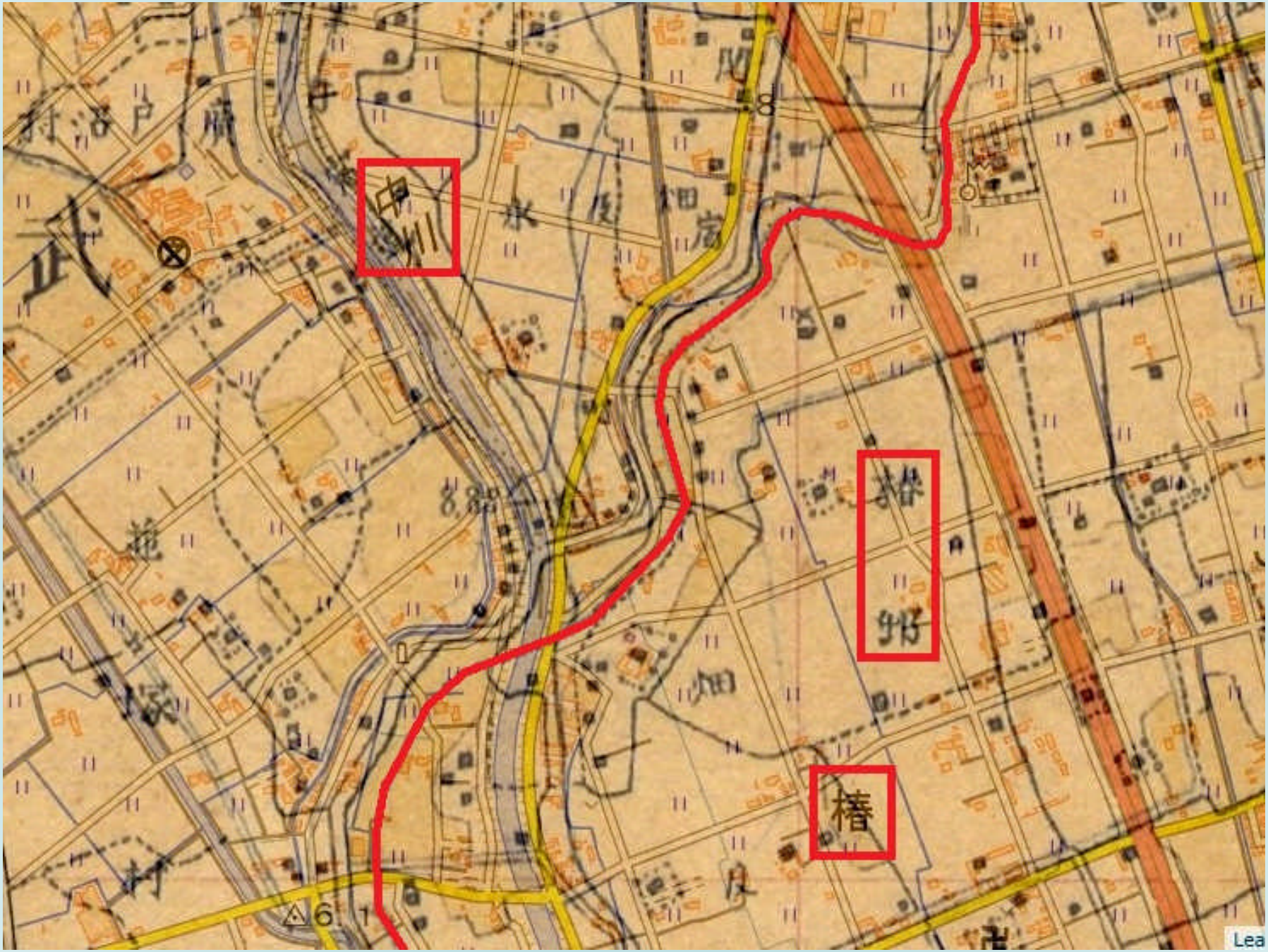
埼玉県立文書館蔵

「明治8下総国葛飾郡之内管轄換之儀再願」

(行政文書 明3679)

の引用データ

より 引用


椿

出典：

「今昔マップon the web」

①「地理院地図」と

②「明治期迅速測図」を

1画面に重ねて表示

(地図不透明度30%)

より 引用・加筆

埼葛地域の地理的環境
１／４

北端で茨城県・東端で千葉県・南端で東京都
と接している
南北に長い中川低地を挟んで
西側に大宮台地・東側に下総台地

- 大宮台地
  蓮田支台・岩槻支台、白岡支台、慈恩寺支台など
  「関東造盆地運動」の影響で
  北部に向かうほど低い「埋没台地」
- 下総台地
  江戸時代初頭に開削された「江戸川」により
  千葉県側の下総台地本体から切り離されている
  宝珠花支台、金杉支台

埼葛地域の地理的環境
２／４

中川低地等は河川による堆積物によって形成された地形
低地の中にも自然堤防や河畔砂丘など
周辺よりも一段高い地形が存在

現在の河川
利根川(北端)・江戸川(東端)・綾瀬川・元荒川(西端)
古利根川・中川(中央)

綾瀬川・元荒川は
台地の谷筋から中川低地へと流れ出し
古利根川・中川と合流して大河川となった

埼葛地域の地理的環境
３／４

埼葛地域に人々が住むようになったのは
旧石器時代(約３万年前～)
氷河期だった当時
東京湾の海水面は低く
中川低地は浸食されて深さ数十mの峡谷や段丘が存在

主な遺跡
宮代町逆井遺跡・前原遺跡
春日部市坊荒句北・坊荒句遺跡など
台地沿いに移動生活を送っていたと推定

埼葛地域の地理的環境
４／４

縄文時代早期の後半(約7,000年前)
元荒川流域を中心に遺跡数は３倍に増え
住居跡や炉穴といった定住的な生活跡が残存
気候は温暖になり中川低地の深い峡谷部に
海が浸入し始め(「縄文海進」)貝塚も形成

現在南部の地域では
この時期の遺跡は確認されていないが
存在しなかったのではなく
その後の海進とこれに伴う堆積作用により
地中深くに埋まってしまったと推定

● 埼葛のあけぼの　－旧石器時代～縄文時代早期－

調理の跡？礫群（春日部市坊荒句北遺跡）
旧石器時代のもので、焼けた石（礫）のまとまりです。蒸し焼きなどの調理の跡と考えられています。

細石刃（宮代町逆井遺跡）
旧石器時代終りごろの小さな石器で、棒の先にはめ込んで使ったと考えられます。

炉穴（杉戸町向山遺跡）
地面を掘りくぼめ火を焚いたようです。縄文時代早期後半に特徴的な遺構です。



埼葛地域に人々が住むようになったのは旧石器時代（約３万年前～）です。氷河期だった当時、東京湾の海水面は低く、中川低地は浸食されて深さ数十ｍの峡谷や段丘となっていました。主な遺跡は宮代町逆井遺跡・前原遺跡や春日部市坊荒句北・坊荒句遺跡などで、台地沿いに移動生活を送っていたようです。

しかし縄文時代早期の後半（約7,000年前）になると、元荒川流域を中心に遺跡数は３倍に増え、住居跡や炉穴といった定住的な生活跡が残されるようになります。気候は温暖になり、中川低地の深い峡谷部に海が侵入し始め（縄文海進）、貝塚も形成されるようになります。

なお現在、南部の地域ではこの時期の遺跡は確認されていませんが、存在しなかったのではなく、その後の海進とこれに伴う堆積作用により、地中深くに埋まってしまったと考えられています。

縄文時代早期後半の土器
（旧庄和町増現山遺跡）
貝殻のようなもので付けたスジ模様（条痕文）が特徴で、底が尖った土器もあります。

- ● 主な旧石器時代遺跡
- ▲ 主な縄文時代早期の遺跡
- ■ 縄文時代早期の貝塚

「河川から見た埼葛」
１／９

埼葛のあけぼの －旧石器時代～縄文時代早期－

旧石器時代(約３万年前～1万４千年前)

出典：

田中 和之(2008)

第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展

「埼葛の遺跡 水とともに」

埼葛地区文化財担当者会

p.4

https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html

より 引用

● 海がもたらした恵み　－縄文時代前期－



竪穴住居内の貝塚
（杉戸町木津内貝塚）
使われなくなった住居をゴミ捨て場にしたのでしょうか。

角を使った漁労具
（松伏町本郷遺跡）
シカの角から作った釣針やヤス。ほかに骨石でできた浮きも発見されています。

アクセサリーの数々
（白岡町タタラ山遺跡）
石をていねいに加工して耳飾りや鳥形や円形のペンダントにしています。

縄文時代前期（約6,000～5,000年前）、縄文海進がピークを迎え、中川低地は内陸まで遠浅の海となりました（奥東京湾）。海は次の中期（約5,000～4,000年前）には一度退いてしまいますが、遺跡数は前期から中期にかけて、200～350遺跡と最も多くなります。潮が引くと集落のふもとに広大な干潟が現れ、魚や貝など豊富な海の幸を安定的に手に入れることができたためでしょう。

海の恵みを示す痕跡が貝塚です。蓮田市関山貝塚・黒浜貝塚群や春日部市花積貝塚など考古学史上でも有名な貝塚のほか、杉戸町木津内貝塚、旧庄和町犬塚遺跡などがその代表例です。貝塚の貝は主にハイガイ・マガキ・アサリ・ハマグリなど干潟や泥底に棲む種ですが、松伏町本郷貝塚では魚や鳥獣、は虫類など多様な動物骨もみられます。

縄文時代前期の土器
（蓮田市天神前遺跡）
天神前遺跡は黒浜貝塚群の一つで、周辺から出土する土器は「黒浜式土器」として土器型式の基準となりました。

- ● 発掘された前期の遺跡
- ▲ 発掘された前期の貝塚遺跡
- ■ 確認されている前期の貝塚遺跡

「河川から見た埼葛」
２／９

海がもたらした恵み －縄文時代前期・中期－
縄文時代前期(約6,000～5,000年前)

出典：
田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p.8
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

● 去りゆく海、低地への第一歩　－縄文時代後期・晩期－



縄文時代後期の大型住居
（白岡町上小笹原遺跡）
長径が10mを超える非常に大きな住居跡です。



縄文時代晩期の土版
（春日部市地蔵田遺跡）
人の顔のような装飾が施されています。祭祀に使われたのでしょうか。

縄文時代後期の土器
（松伏町本郷貝塚）
1ヶ所からまとまって出土しました。食器一式でしょうか。



縄文時代後期（約3,500年前）になると、一度退いた海が再び中川低地へ進出しますが、前期に堆積作用が働き、奥地まで進入しません。後期の貝塚は馬蹄形貝塚、環状貝塚といわれる規模の大きな貝塚が見られるのが特徴で、下総台地側を中心に大規模な貝塚が点在しています。埼玉県東部、千葉県西部に見られる貝塚を見てみると、縄文時代後期の海は下総台地側に寄って存在した可能性が高いと考えられます。この海は確認される貝種から干潟を伴う浅い穏やかな海であったことが想像できます。

晩期（約2,500年前）に入ると埼玉県内の遺跡数は減少しますが、発見されている遺跡を見てみると低地部にも生活の痕跡が残されている遺跡が確認できます。吉川市川藤では縄文時代晩期頃の肥沃地に存在する樹木（オニグルミ）が確認されています。こうしたことから、縄文時代晩期には中川低地から海は退き、人々はその生活の場を求めて低地に進出していった可能性が高いと考えられます。

吉川市川藤で発見されたオニグルミ

- ● 主な縄文時代後期、晩期の遺跡
- ▼ 川にすむ貝の貝塚
- ▲ 川と海の境にすむ貝の貝塚
- ■ 海にすむ貝の貝塚

「河川から見た埼葛」
３／９

去りゆく海、低地への第一歩 ―縄文時代後期・晩期―
縄文時代後期(今から約3,500年前)

出典：
田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p.10
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

● 低地利用のはじまり　－弥生時代～古墳時代前期－



鷲宮町栗原出土土器

No.1～6遺跡のある栗原地区からは古墳時代前期の土器が発見されており、遺構存在の可能性がうかがえます。



登明神社古墳

（杉戸町登明神社古墳）

自然堤防に立地する古墳の可能性がある高まりで、古墳時代前期の底部が穿孔された土器などが出土しています。

再葬墓（旧庄和町須釜遺跡）

自然堤防に立地し、11基の再葬墓が発見されています。

再葬墓出土土器

（遷出市宿下遺跡）

宿下遺跡では２基の再葬墓が発見され、土器とともに管玉が出土しています。



埼葛地域における弥生時代遺跡の確認は弥生時代中期と呼ばれる時期からです。大宮台地上の旧岩槻市域付近に遺跡の集中が見られます。人々の低地への進出が確実に確認できるのもこの時期からで、中川低地の自然堤防上、旧庄和町須釜遺跡で再葬墓が検出されています。出土した土器には表面に籾殻の圧痕が残るものもあり、稲作の開始がうかがえます。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、遺跡数が爆発的に増加します。台地上にはもちろん、自然堤防上にも遺跡が分布し、台地が無い埼葛地域南部においても自然堤防上で遺跡が確認されはじめます。古墳時代前期は弥生時代後期からの伝統を多く引き継いでおり、例えば方形周溝墓と呼ばれる弥生時代に特徴的な墓の形が古墳時代前期にも確認されます。またＳ字状口縁台付甕など他地域の土器が多く確認され、地域間の交流が盛んになっていたことがわかります。

■ 弥生時代中期の遺跡
● 弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡

「河川から見た埼葛」
４／９

低地利用のはじまり　－弥生時代～古墳時代前期－

出典：

田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p. 12
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

● 川と低地利用の広がり　－古墳時代中期・後期－



最大の古墳

（熊谷市天王山塚古墳）

全長110m、後円部径65m、前方部幅62mの埼玉地域最大の古墳です。



系統の違う埴輪

（春日部市埼玉古墳群）

内牧古墳群に含まれる本古墳からは武蔵型と下総型の埴輪が同一古墳から出土しています。



古墳時代後期の土器

（熊谷市見出方遺跡）

自然堤防上に立地する集落跡で、昭和41年に中川低地で初めてとなる発掘調査が行われました。

古墳時代中期は前期に比べ遺跡数が大幅に減少します。後期は増加し、奈良時代へと続いていきます。低地の遺跡は散在的ではあるものの前期に比べ後期には遺跡数が増えており、河川氾濫などの影響を受けつつも、低地利用が拡大したものと考えられます。今後の低地での調査によって、中期の遺跡も含めさらに遺跡数が増えることでしょう。

古墳は、中期から確認され、特に後期の群集墳と呼ばれる古墳群が多く見られます。古墳の石室石材には、秩父を原産地とする緑泥片岩や群馬県榛名山の噴火によって生成された角閃石安山岩、「房州石」と呼ばれる房総半島南部を産地とする石が使用されており、河川を利用した舟運によって石材が運ばれたものと思われます。また、武蔵型埴輪、下総型埴輪と呼ばれる異系統の埴輪が同一古墳や古墳群から出土するといった特徴が挙げられます。

■ 古墳時代中期の遺跡
● 古墳時代後期の遺跡
▲ 中期・後期の古墳（群）

「河川から見た埼葛」
５／９

川と低地利用の広がり　－古墳時代中期・後期－

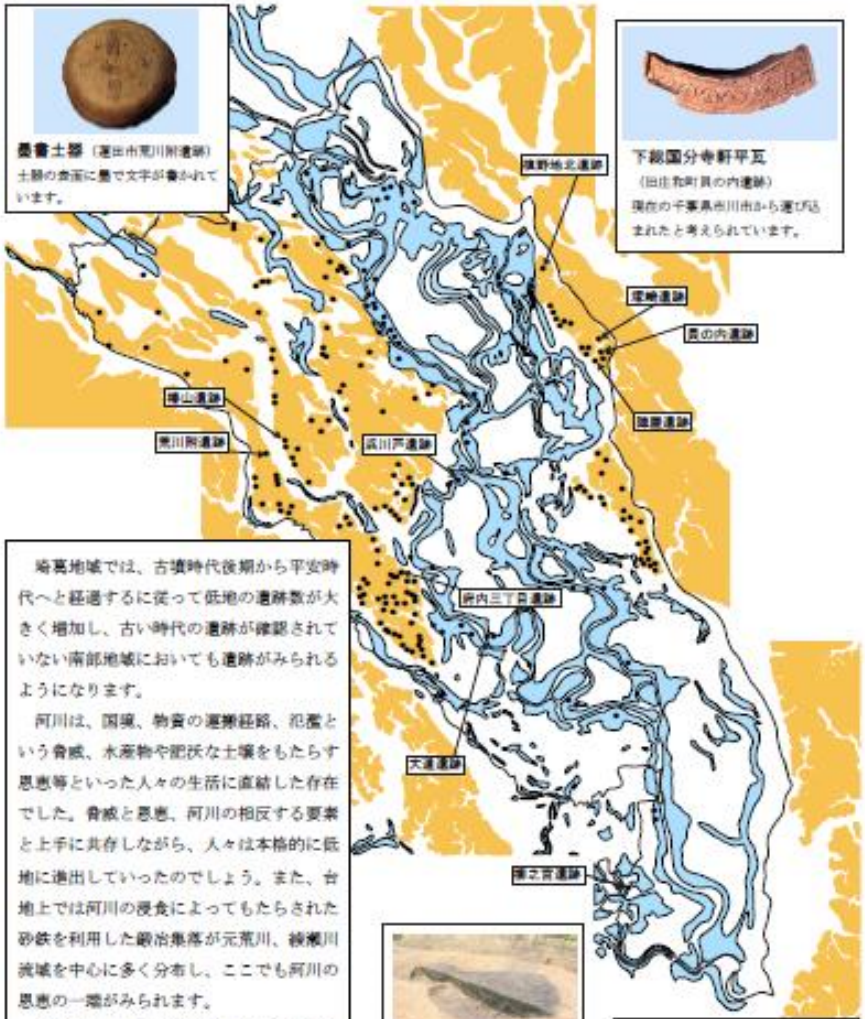
出典：

田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p.14
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

● 川との共存、そして活用　－奈良･平安時代－

墨書土器（運出市荒川附遺跡）
土器の表面に墨で文字が書かれています。

下総国分寺軒平瓦
（出庄町貝の内遺跡）
現在の千葉県市川市から運び込まれたと考えられています。



崎寓地域では、古墳時代後期から平安時代へと経過するに従って低地の遺跡数が大きく増加し、古い時代の遺跡が確認されていない南部地域においても遺跡がみられるようになります。

河川は、国境、物資の運搬経路、氾濫という脅威、水産物や肥沃な土壌をもたらす恩恵等といった人々の生活に直結した存在でした。脅威と恩恵、河川の相反する要素と上手に共存しながら、人々は本格的に低地に進出していったのでしょう。また、台地上では河川の浸食によってもたらされた砂鉄を利用した鍛冶集落が元荒川、綾瀬川流域を中心に多く分布し、ここでも河川の恩恵の一端がみられます。

さらに、河川の直線部や蛇行点の内側といった氾濫の影響を受けにくい地点に多くの遺跡が立地していることから、氾濫に備えた集落選地が考慮されていた可能性も読み取れるでしょう。



土器焼成遺構
（綾瀬市大道遺跡）
集落内で土器を焼成した跡と推定されます。



樹材製竪杵（八潮市椎立吉遺跡）
地表下1mから出土したもので、理化学的な分析によって今から1,070年前頃のものと推定されています。

「河川から見た埼葛」
６／９

川との共存、そして活用 ―奈良・平安時代―

出典：

田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p. 16
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

● 川との発展　－鎌倉～戦国時代－

足利政氏館跡
（久喜市）
古河公方足利政氏の館跡とされる甘棠院には、現在でも周囲に堀が残されています。

瀬戸焼の鎧着壺（骨壺）
（菖蒲町小菖蒲中世墓地）
中世の墓地から板碑40点や常滑焼の大壺とともに出土しました。

幸手一色氏関係の漆椀
（幸手市小渕山下北遺跡）
戦国時代に幸手の領主だった一色氏の紋である「二引両」が描かれた漆椀です。古利根川東岸のこの地は、一色氏の支配領域であった下総国幸手領の南端にあたると考えられています。



中世（鎌倉・室町・戦国時代）には埼葛地域に鎌倉から奥州に抜ける鎌倉街道中道が通っていたとされており、杉戸町浅間前遺跡の街道に関係すると推測される人口堤防を始めとして、街道周辺に遺跡が多い特徴が見受けられます。

また、陸上の道とともに川を利用した水運も発展していた考えられており、春日部市浜川戸遺跡など河川の分岐点に展開し、水運との関連を想定させる遺跡があります。

戦国時代には、埼葛地域も戦乱の中に巻き込まれ、戦に備えて各地に城館が築かれていきます。代表的な城館に旧岩槻市岩付（岩槻）城、蓮蔵町蓮蔵城などがあります。

また、低地部にも多くの城館跡が残され、前時代と同じく自然堤防をたくみに活用している様子が窺えます。河川交通との係わりなども含めて、低地部の城館跡の今後の発掘調査が期待されます。

貿易陶磁器
（旧岩槻市岩槻城跡）
大規模な城であった岩槻城跡からは中国製の陶磁器なども出土しています。

- ● 中世の遺跡
- ▲ 中世の城館または城館を含む遺跡
- ━ 鎌倉街道中道の主な道筋（推定）
- ┄ 中世の武蔵・下総国境

「河川から見た埼葛」
7／9

川との発展 ―鎌倉～戦国時代―

出典：

田中 和之(2008)

第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展

「埼葛の遺跡 水とともに」

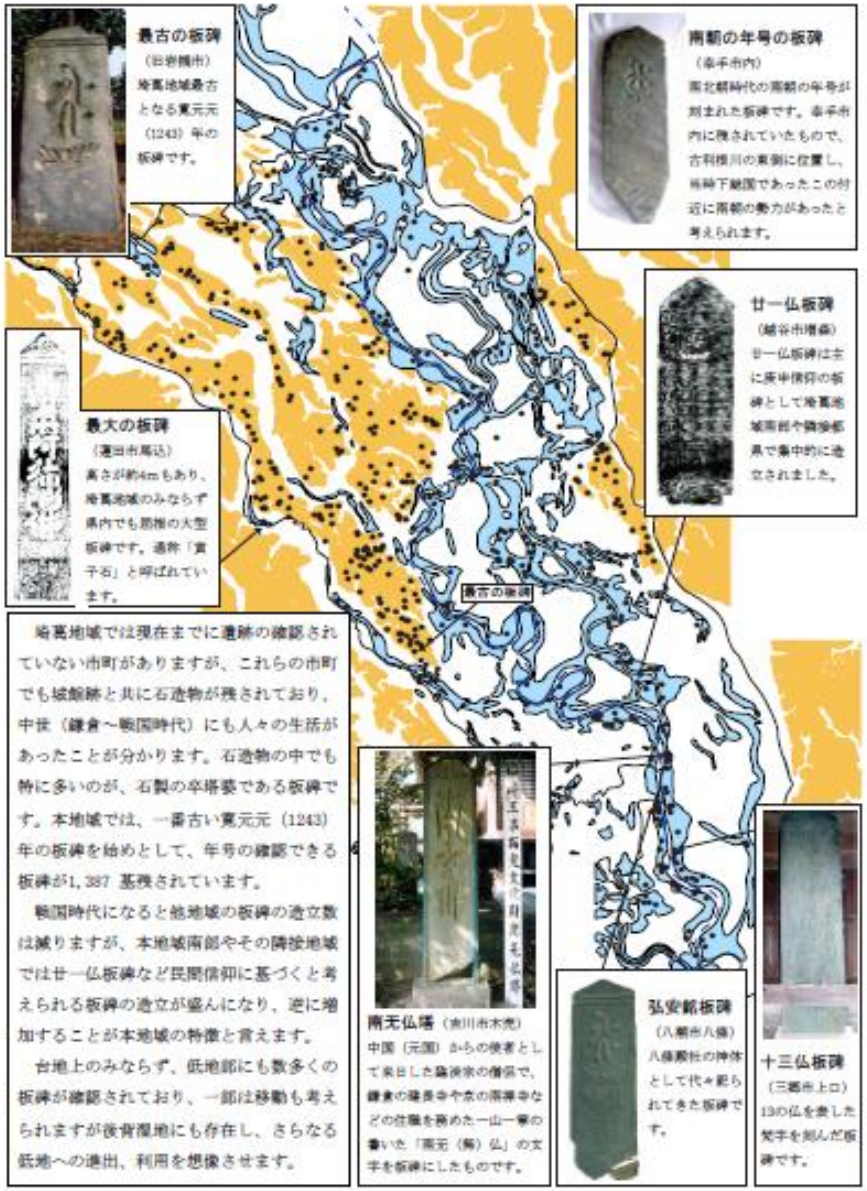
埼葛地区文化財担当者会

p.20

https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html

より 引用

● 石造物からみた低地の利用　－鎌倉～戦国時代－



埼葛地域では現在までに遺跡の確認されていない市町がありますが、これらの市町でも城館跡と共に石造物が残されており、中世（鎌倉～戦国時代）にも人々の生活があったことが分かります。石造物の中でも特に多いのが、石製の卒塔婆である板碑です。本地域では、一番古い寛元元（1243）年の板碑を始めとして、年号の確認できる板碑が1,387 基残されています。

戦国時代になると他地域の板碑の造立数は減りますが、本地域南部やその隣接地域では廿一仏板碑など民間信仰に基づくと考えられる板碑の造立が盛んになり、逆に増加することが本地域の特徴と言えます。

台地上のみならず、低地部にも数多くの板碑が確認されており、一部は移動も考えられますが後背湿地にも存在し、さらなる低地への進出、利用を想像させます。

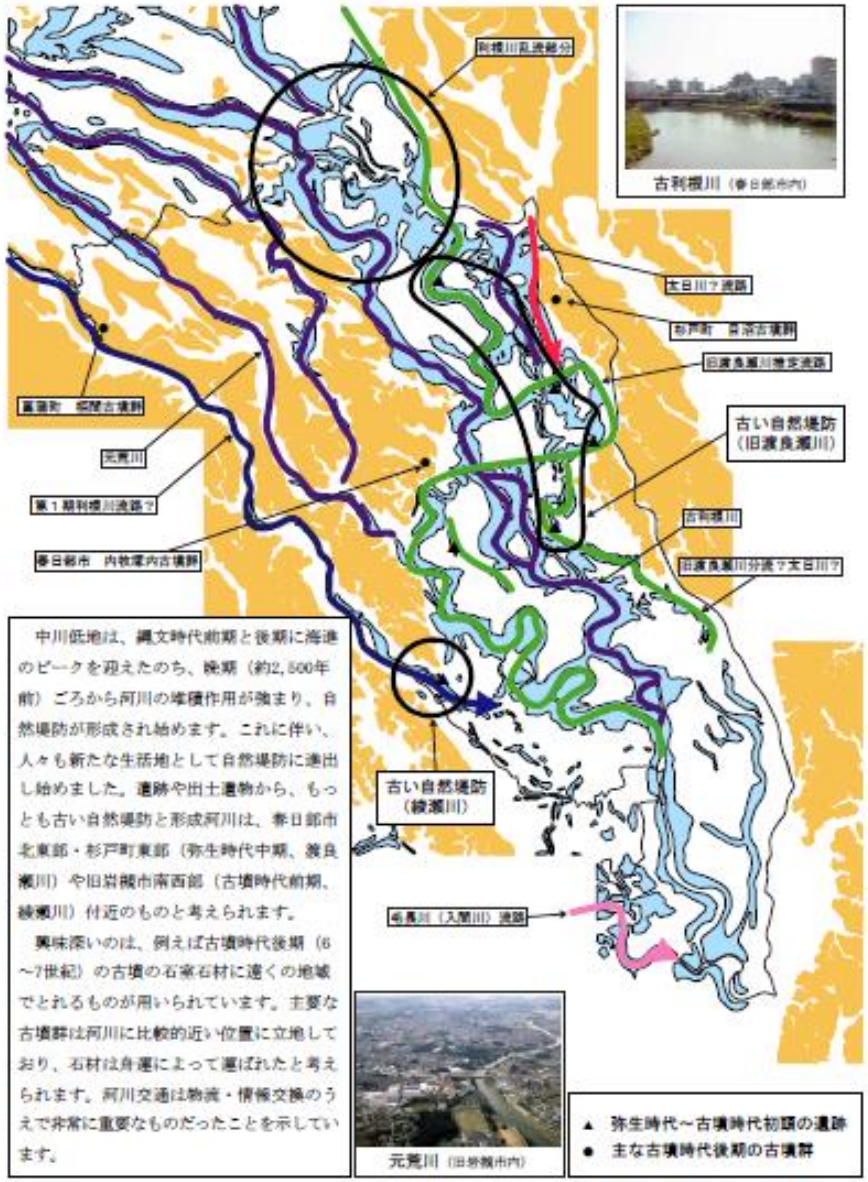
「河川から見た埼葛」
８／９

埼葛地域の板碑

出典：

田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p.22
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

● 遺跡からみた河川のうつりかわり



中川低地は、縄文時代前期と後期に海進のピークを迎えたのち、晩期（約2,500年前）ごろから河川の堆積作用が強まり、自然堤防が形成され始めます。これに伴い、人々も新たな生活地として自然堤防に進出し始めました。遺跡や出土遺物から、もっとも古い自然堤防と形成河川は、春日部市北東部・杉戸町東部（弥生時代中期、渡良瀬川）や旧岩槻市南西部（古墳時代前期、綾瀬川）付近のものと考えられます。

興味深いのは、例えば古墳時代後期（6～7世紀）の古墳の石室石材に遠くの地域でとれるものが用いられています。主要な古墳群は河川に比較的近い位置に立地しており、石材は舟運によって運ばれたと考えられます。河川交通は物流・情報交換のうえで非常に重要なものだったことを示しています。

「河川から見た埼葛」
９／９

遺跡から見た河川のうつりかわり

出典：

田中 和之(2008)
第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」
埼葛地区文化財担当者会
p.24
https://www.town.miyashiro.lg.jp/0000002431.html
より 引用

「渡良瀬川を源流とする河川」
１／６

「渡良瀬川を源流とする河川の一部としての
「東」からの流路」の存在を提示する「先行研究」

出典：田中 和之(2008)
「遺跡からみた河川のうつりかわり−まとめにかえて− 」
「第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展
「埼葛の遺跡 水とともに」」
埼葛地区文化財担当者会 pp. 24−26

「渡良瀬川を源流とする河川」
２／６

中川低地で現在も残る
もっとも古い自然堤防は
弥生時代以降のもので
２つの地域で認められる

まず一つは中川低地本筋の
幸手市・杉戸町から旧庄和町にかけての一帯

これらの自然堤防上には
幸手市「No22遺跡」杉戸町「大堀南遺跡」
旧庄和町「須釜遺跡」など
弥生中～後期(約2,000～1,800年前)の遺跡が展開し
上流の渡良瀬川からつながる流路であると推測

「渡良瀬川を源流とする河川」
３／６

この古い自然堤防(流路)は
春日部市中央部でさらに
2方向に展開した可能性があると推測

一方は
春日部市「沼廻(ぬままわり)遺跡(弥生時代)」が存在する
南ルートが想定

もう一方は
春日部市「浜川戸遺跡」が控える
「古隅田川流路(現在と逆の流れ)」方向の
西ルートが想定

「渡良瀬川を源流とする河川」
４／６

もう一つの古い自然堤防は
綾瀬川筋で
旧岩槻市南部「釣上碇(かぎあげいかり)遺跡」
をはじめとする
弥生時代から古墳時代前期(約1,700年前)にかけての遺跡が
点在する

この筋の下流域の自然堤防は
残丘状の景観をとどめているにすぎないが
越谷市「見田方(みたかた)遺跡(古墳後期)」は
この残丘状自然堤防の一つに展開

「渡良瀬川を源流とする河川」
５／６

綾瀬川筋の自然堤防は
現在の川の流量と釣り合わない規模であることから
かつて利根川本流筋が
同川筋を流下したと考えるのが妥当

古墳時代後期(約1,400年前)には
自然堤防が安定してきたことが推測

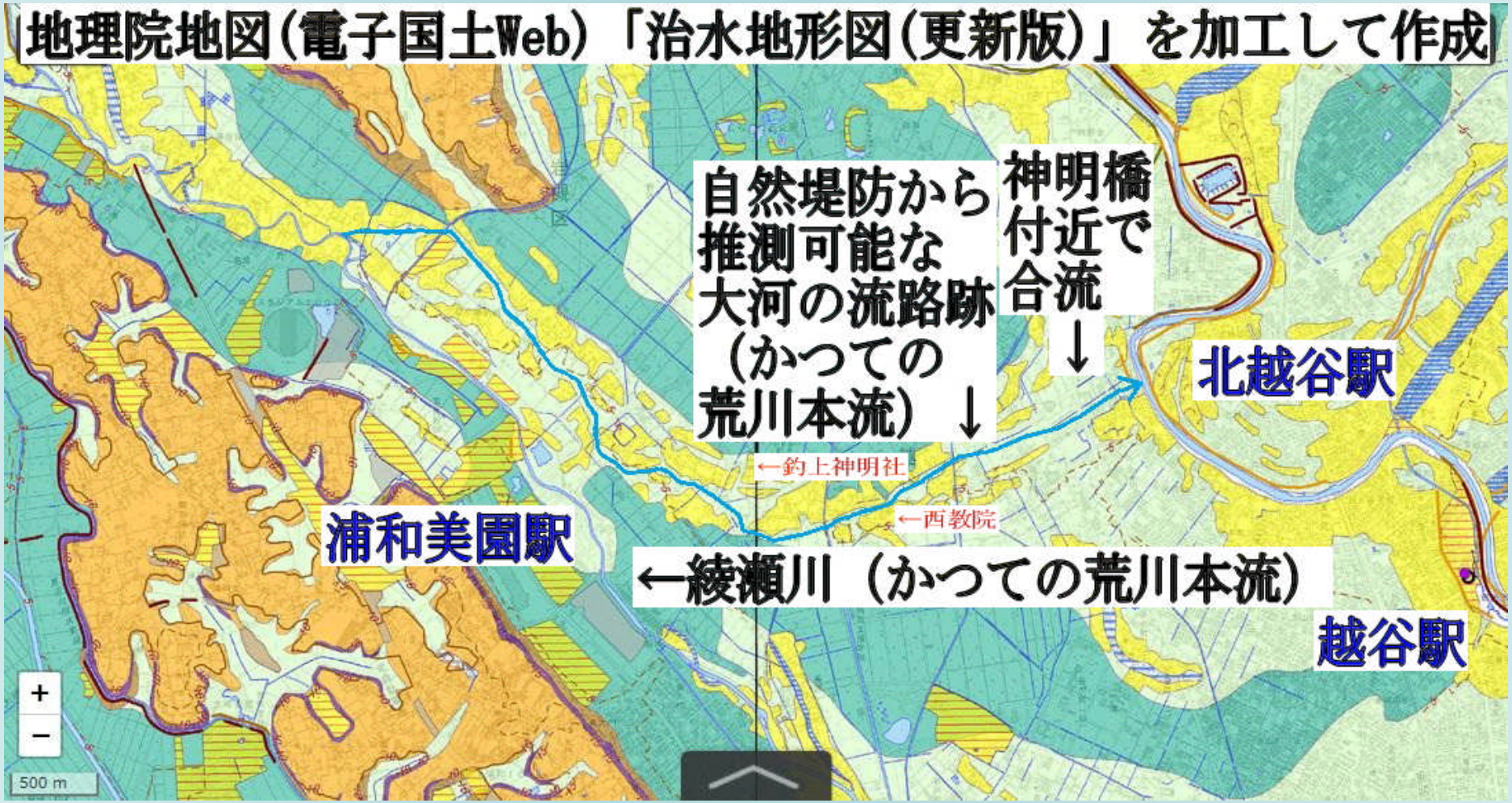
その例として
古墳時代後期から中世まで継続する
春日部市小渕「山下北遺跡」の存在
地質学的にも利根川本流筋が
この時代に現古利根川流域に移ったと推測

「渡良瀬川を源流とする河川」
６／６

※田中 和之(2008)において
「綾瀬川筋の自然堤防は
現在の川の流量と釣り合わない規模であることから
かつて利根川本流筋が同川筋を流下したと
考えるのが妥当である」

との仮説に対して

※秦野 秀明(2018)において
「荒川本流筋が同川筋を流下した」と推測
出典：出典：秦野 秀明(2018)
第490回 史跡めぐり 「岩槻区南東部とベトナム寺院」


地理院地図(電子国土Web)「治水地形図(更新版)」を加工して作成
自然堤防から
推測可能な
大河の流路跡
(かつての
荒川本流)↓
神明橋
付近で
合流
↓
北越谷駅
←釣上神明社
←西教院
浦和美園駅
←綾瀬川 (かつての荒川本流)
越谷駅
+
−
500 m

ISSN 0385-1761

埼玉考古

53

論　文

行司免遺跡出土の小型磨製石斧
—擦切り技法を用いた石斧製作—　栗島義明

縄文時代後晩期集落形態の多様性
—大宮台地南半さいたま市域を中心として—　吉岡卓真

武蔵国における木炭槨について
—埼玉稲荷山古墳礫槨の被葬者は渡来系—　野本孝明

北武蔵における在地産暗文坏　知久裕昭

埼玉県東部地区の古代紡錘車　杉山和徳

古隅田川の一考察
—春日部市周辺の古隅田川流路—　鬼塚知典

条里制の全体像と遺跡の見つけ方　吉川國男

小村田東遺跡出土の南伊勢系鍋　元林恵子

資料報告
宝登山頂下、ロウバイ小径で石斧を踏む　鶴見貞雄

2018
埼玉考古学会
since1955

出典：

鬼塚 知典(2018)

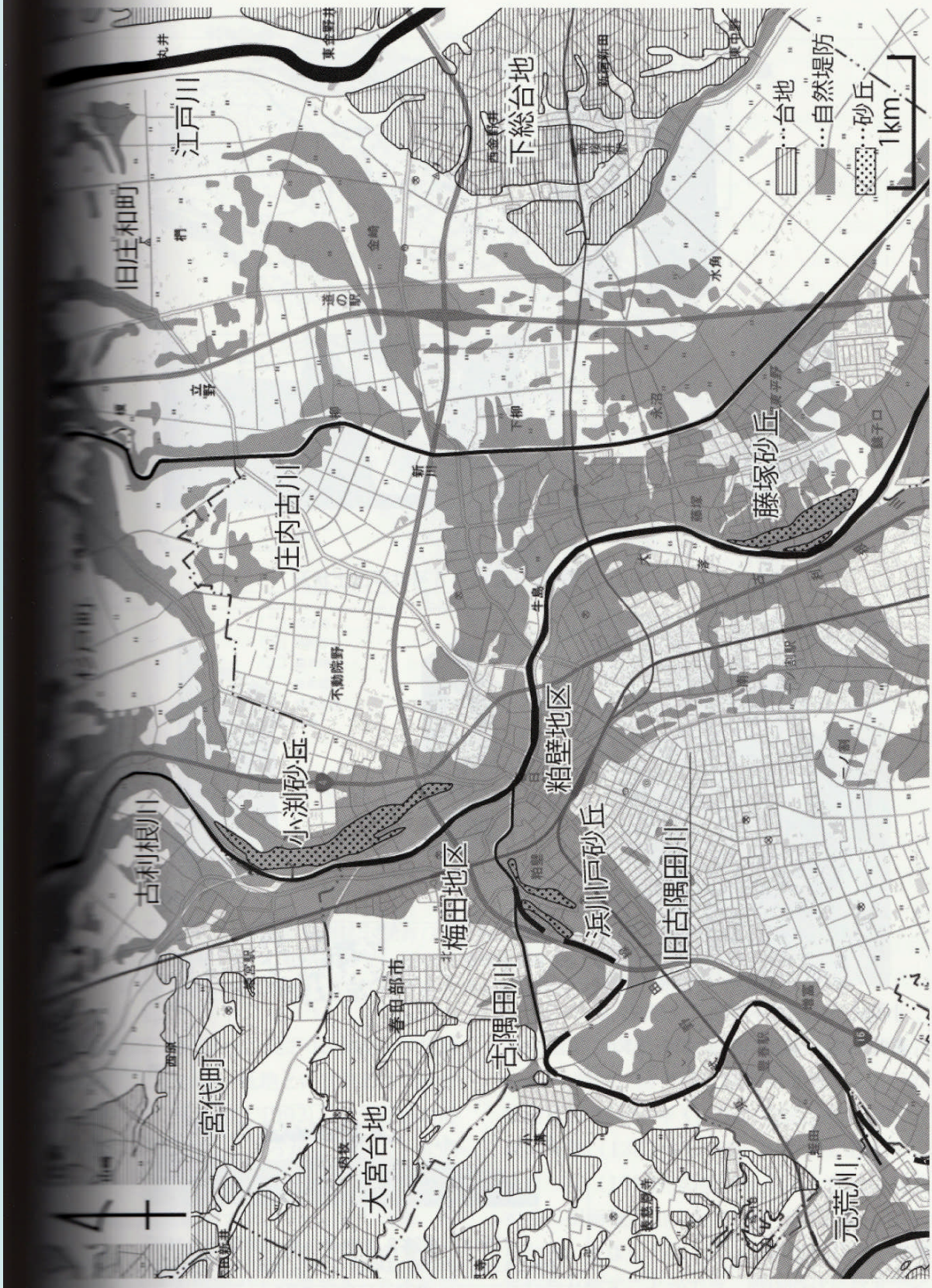
「古隅田川の一考察

−春日部周辺の古隅田川流路− 」

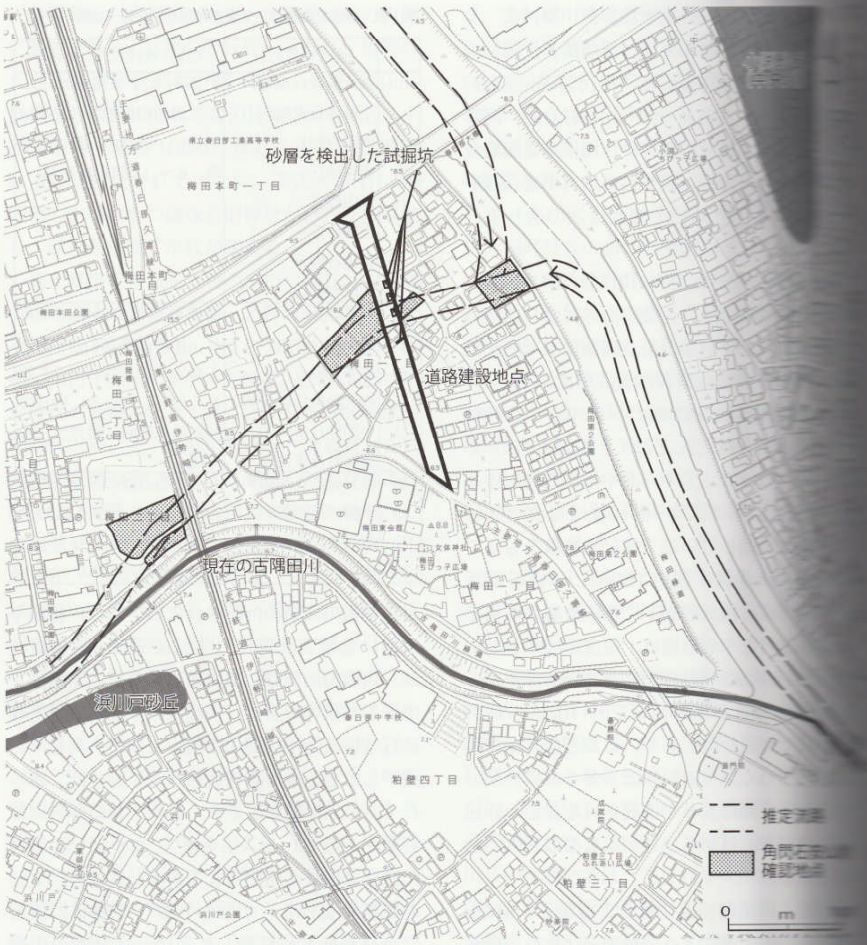
『埼玉考古』第53号

埼玉考古学会　pp. 77−88

より 引用



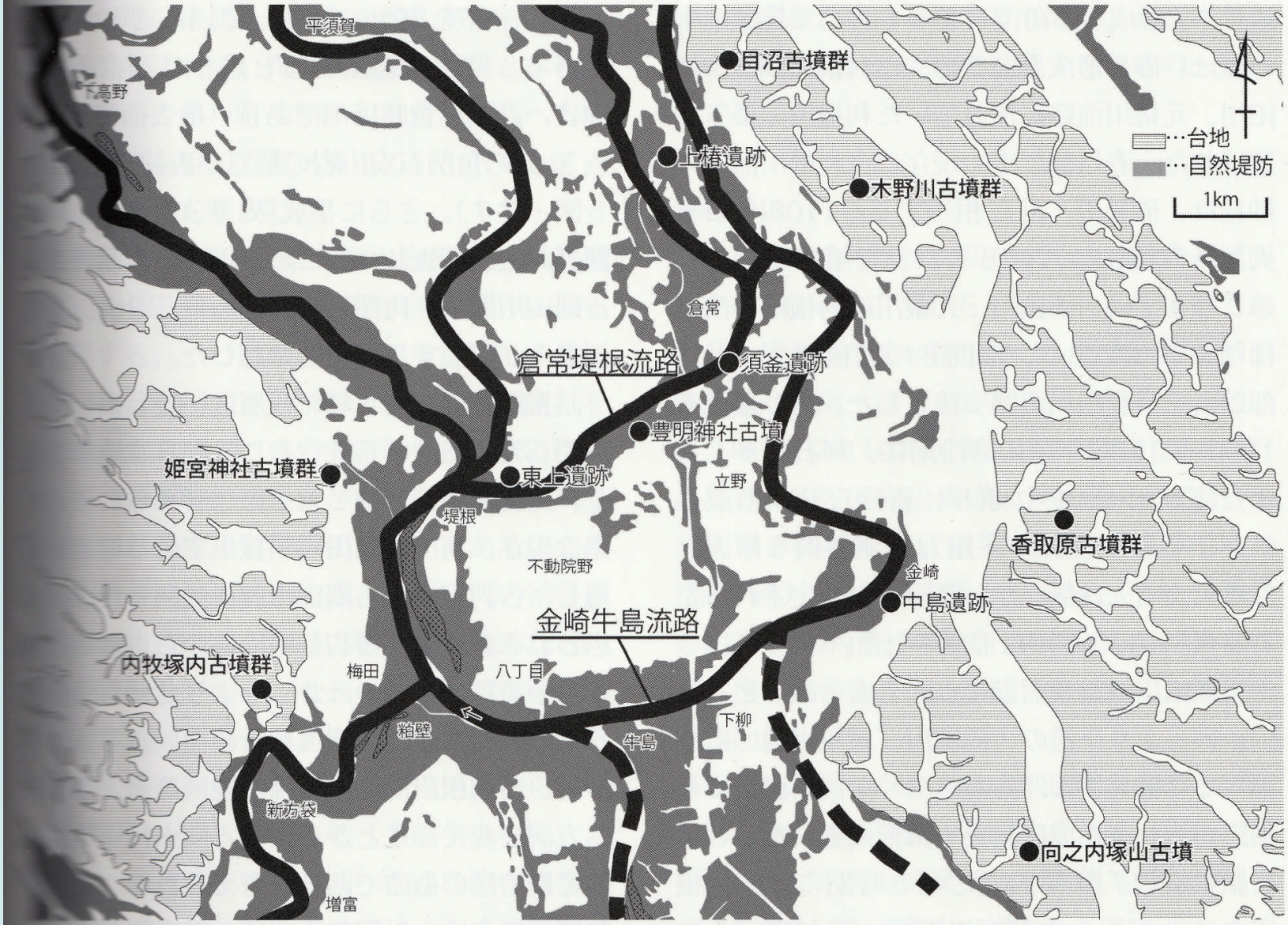
第１図　春日部市周辺の地形と河川
（国土地理院電子地形図（タイル）に「治水地形分類図更新版」に基づく地形を追記）



第４図　梅田地区道路建設地点砂層及び角閃石安山岩（軽石）確認地点



第５図　採集した角閃石安山岩（軽石）



第６図　春日部市周辺の古墳時代前期までの遺跡（自然堤防上）と古墳、主要流路推定図

（地形範囲は国土地理院「治水地形分類図更新版」に基づく）

「古隅田川・元荒川流路」
１／５

①かつての利根川が
　現春日部市梅田地区で
　「古隅田川・元荒川流路」と
　「大落古利根川流路」に分流し
　２つの流路が同時に形成された
　出典：既存の研究

②かつての利根川の流量の殆どが
　「古隅田川・元荒川流路」へ流れた時期があった
　出典：越谷北高校天文気象部・佐藤 和平・関山 聡(1991)
　　「河畔砂丘の研究 −南限の河畔砂丘」
　　埼玉県立越谷北高校

「古隅田川・元荒川流路」
２／５

③鬼塚 知典(2018)

かつての利根川が
現春日部市梅田地区に到達した際には
既に梅田地区からの「古隅田川・元荒川流路」は
「渡良瀬川を源流とする「東」からの流路」の
延長として形成された

出典：鬼塚 知典(2018)
「古隅田川の一考察 -春日部周辺の古隅田川流路- 」
『埼玉考古』第53号 埼玉考古学会 pp. 77-88

「古隅田川・元荒川流路」
３／５

・鬼塚 知典(2018)
大宮台地の「東側」へ利根川が流入する以前の
「渡良瀬川を源流とする河川の一部としての
「東」からの流路」

①「倉常(くらつね)堤根流路」の自然堤防上
弥生時代の「須釜遺跡」
古墳時代の豊明神社古墳・「東上遺跡」

②「金崎(かなさき)牛島流路」の自然堤防上
古墳時代の「中島遺跡」

「古隅田川・元荒川流路」
４／５

・鬼塚 知典(2018)

②「金崎牛島流路」は
「大落古利根川流路」を現在とは「逆」の流れで
「北西」へ進み
「古隅田川・元荒川流路」へ流れた
かつての利根川が現春日部市梅田地区に到達した際には
「西流」する「金崎牛島流路」に従い
「古隅田川・元荒川流路」へ流れた。
かつての利根川が現春日部市梅田地区で
急に「西」へ曲がって
「古隅田川・元荒川流路」を形成したのではない。

「古隅田川・元荒川流路」５／５

・鬼塚 知典(2018)
越谷北高校天文気象部・佐藤 和平・関山 聡(1991)
の分類による
平安時代の終わり頃の「新砂丘Ⅰ」の形成期頃から
鎌倉時代の「新砂丘Ⅱ」の形成期頃までに
大量の砂が堆積した結果
「古隅田川・元荒川流路」への流入が困難になり
「大落古利根川流路」へ「東流」していた
「金崎牛島流路」も大量の砂の堆積後に
利根川の流れに従い
現牛島地区の合流点から「南流」した

Ⅰ．はじめに

私たち越谷北高校天文気象部は、その名前の通り天文・気象関係の部活動ですが、従来は文化祭のための手作りプラネタリウムの作成や、天体観望、天体写真の撮影など、理科的な研究というよりは趣味的な活動を行なってきた部活動でした。部員も多く、楽しい部活動ですが、ふだんの日の放課後はあまりすることもなく、文化祭前をのぞいてはわりとヒマな部活動でした。

そんな状態の中で、先輩達は、観測できない普通の日の放課後に何か研究的なことができないかと考え、顧問の先生に相談しました。顧問の先生は地質が専門の先生でしたので、提案された研究テーマは河畔砂丘の研究ということで、天文気象とはぜんぜん関係のないテーマでした。でも、とにかく昼間やることがほとんどないということで、先輩達は学校の近くの元荒川という川のそばを流れる砂丘の研究を始めました。最初の年は始めたのが夏休み直後からだったので、時間がなくまとめも不十分でしたが、なんとか高校科学展に間に合わせることできました。「河畔砂丘の研究ー南限の河畔砂丘」という題名の、この研究は、元荒川ぞいにそれまで知られていなかった砂丘を発見したという内容の研究でしたが、高い評価をいただき、読売学生科学賞に出品され入選することができました。

次の年、研究テーマをどうするかというミーテングで、部の研究テーマとして砂丘とは違う他の色々なテーマがだされましたが、砂丘について、次のような意見が出され、やはり研究を継続していこうということになりました。

意見というのは

1．越谷市だけでなく、埼玉県全体の河畔砂丘の様子を調べよう
2．なぜ、埼玉県にだけ河畔砂丘があるのか、その理由を明らかにしよう
3．河畔砂丘の時代を確定しよう

このようなことから、二年目からの研究の目標は「河畔砂丘がいつの時代に何が原因でどのようにしてできたのか」を知ることということになりました。埼玉県全体の河畔砂丘を調べるということで、調査に２年間かかってしまいましたが、今は「埼玉県の河畔砂丘の成因についてはほぼ確実にわかった」という実感をもっています。

この研究を行なっていく上では、越谷北高校の先生方だけではなく、多くの方々にお世話になりました。特に春日部東高校地学科からは偏光顕微鏡の他、多数の研究機材をお借りしました。春日部市の市史編纂室の方々には遺跡の発掘資料について閲覧させていただきました。埼玉県史編纂室の方々には、私たちが発掘した土器の鑑定の他、吾妻鏡や日本気象資料総覧などの本の閲覧に便宜をはかっていただきました。また、群馬県の歴史博物館の方々には群馬県における遺跡発掘のデーターを閲覧させてもらいました。これらの方々に深く感謝したいと思います。

	該当する砂丘	地形の特徴	地質の特徴	重鉱物組成の特徴	粒度組成の特徴	砂丘の年代
新砂丘Ⅰ	西大輪砂丘東側砂丘列 小渕砂丘東側砂丘列 浜川戸砂丘 長宮砂丘 袋山砂丘 大林砂丘 東越谷砂丘 大成町砂丘	平面的な分布範囲は広いが、周囲の低地との比高は小さい(2～3m)。砂丘の斜面は緩傾斜で全体にブロードな形の砂丘地形	風成の上部層は薄い水成の下部層には角閃石が目立つ白色軽石が濃集している。風成層にも角閃石を含む白色軽石が多い	紫蘇輝石、普通輝石が多いが、角閃石も多い新砂丘Ⅱ、Ⅲに比較して角閃石が多いのが最大の特徴。また、普通輝石が比較的多い。 榛名二ツ岳軽石の噴火は角閃石の多い火山噴火なのでその影響を強くうけている。	風成層の淘汰度にバラつきがある。粒径が粗くなると淘汰度が悪く（値が大きくなる）なる傾向がある。	浜川戸砂丘が覆っている浜川戸遺跡は古墳時代以降の遺跡。小渕砂丘東側砂丘列の砂丘砂中から発掘された須恵器は大瓶は奈良～平安の土器。新砂丘Ⅰは奈良、平安期に形成。
新砂丘Ⅱ	新郷砂丘 砂山砂丘 志多見砂丘 西大輪砂丘中央砂丘列 小渕砂丘中央砂丘列 藤塚砂丘東側砂丘列	埼玉県東部の砂丘の典型的な砂丘。比高が大きく分布範囲も最大。いずれの砂丘も細長く分布している。 砂丘の傾斜は急傾斜。	風成の上部層は厚い水成の下部層には角閃石が目立つ白色軽石と灰色～褐色の軽石が濃集している。風成の上部層にも白色と灰色～褐色軽石が含まれる。	紫蘇輝石、普通輝石が多く、角閃石が多い新砂丘Ⅰに比較して角閃石が少ないのが最大の特徴。 浅間Ｂテフラの影響を受けている。	風成層の淘汰度は非常にまとまっている。新砂丘Ⅰのようにバラつくことはない。上流から下流部へと連続的に粒径が細粒となっている。	高野砂丘では砂丘砂に覆われる人工堤防が1194年または、1253年の年代 藤塚砂丘上の東国寺の創立年代が1303年。 12世紀～14世紀に形成された。
新砂丘Ⅲ	西大輪砂丘西側砂丘列 小渕砂丘西側砂丘列 藤塚砂丘西側砂丘列 田中砂丘	緩傾斜の砂丘で分布範囲が狭く、規模が非常に小さい。	風成の上部層は非常に薄い。白色、灰色～褐色軽石粒を含む	紫蘇輝石、普通輝石が多く、角閃石は非常に少ない。	風成の上部層は淘汰度がバラつく。	小渕砂丘西側砂丘列では砂丘砂に覆われる泥層から釉薬のかかった土器片出土。鎌倉時代すぎに形成。

新砂丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの違いと特徴

Ⅸ．結論－河畔砂丘の形成史－

以上の研究結果より、埼玉県の河畔砂丘の形成史は以下のようにまとめられます。

1. 榛名二ツ岳の噴火と自然堤防の形成

６世紀中頃～７世紀の榛名二ツ岳の噴火は大規模な噴火で、この噴火により利根川下流域には大量の泥流がもたらされ埋積する集落もありました。このころ埼玉県の利根川は現在の会ノ川～古利根川～古隅田川～元荒川を流れており、越谷のすぐ南方には海が広がっていました。榛名火山の堆積物は上記河川の狭状部に大きな自然堤防を形成しました。

2. 新砂丘Ⅰの形成

平安時代ころ、日本に寒冷期が訪れ北西季節風が強まり、自然堤防上に風成砂が堆積しました。この寒冷期は穏やかに長く続いたため、砂丘は緩傾斜となり砂丘砂の淘汰度は分散しています。以上の過程で新砂丘Ⅰは形成されましたが、新砂丘Ⅰの堆積物は、角閃石を多く含むなど重鉱物組成、全砂粒組成、軽石の性質（軽石の重鉱物組成、ガラスの屈折率）などから榛名の噴出物に由来する物質が大半でした。

3. 浅間Ｂ噴火（浅間追分火砕流噴火）

1108年頃浅間山が追分火砕流を流出する大噴火をおこし、浅間Ｂテフラを噴出しました。この噴火は天明の大噴火よりも巨大なもので、吾妻川、烏川などをへて利根川にもたらされた泥流は下流部に大きな被害をもたらしました。埼玉県ではこのころ古隅田川、元荒川はすでに利根川本流ではなくなっており、現在の古利根川が利根川本流でした。浅間の堆積物は川の狭状部に自然堤防を形成しました。

4. 新砂丘Ⅱの形成

1200年～1300年ころの日本の寒冷期は激しいもので、自然堤防上に小高い新砂丘Ⅱを形成しました。この時の砂丘砂は強い風を反映して淘汰度の集中が非常に良くなっています。新砂丘Ⅱの堆積物は浅間の噴出物を反映して角閃石が少なく、輝石が多くなっていきました。また、このころには埼玉県加須付近を中心とした沈降運動のため、会ノ川ぞいに形成された新砂丘Ⅰは低地の中に埋積されていきました。

5. 新砂丘Ⅲの形成

室町時代以降、新砂丘Ⅱの西側に小規模な新砂丘Ⅲが形成されました。このⅢの堆積物には榛名軽石に由来する砂粒は少なく、角閃石は少なくなっています。

出典：

越谷北高校天文気象部・

佐藤 和平・関山 聡(1991)

「河畔砂丘の研究 － 南限の河畔砂丘」

埼玉県立越谷北高校　pp. 1–53

より 引用

ISSN 0388-7006

群馬県立歴史博物館紀要

Bulletin of the Gunma Prefectural Museum of History

第 21 号

2000

群馬県立歴史博物館所蔵・管理の土版・岩版類
…… 外山　和夫　1～12
石田川式土器の再検討（3）
―高杯・器台・鉢形土器を中心として―
…… 小泉　範明・井上　昌美・飯島　義雄　13～34
利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義
―榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石―
…… 秋池　武　35～60
古墳時代銅鏡の製作方法の検討
―獣帯鏡のいわゆる「同型鏡」を基にして―
…… 飯島　義雄・小池　浩平　61～84
東山道駅路に関する一考察
―武蔵路の設置の意味について―
…… 小池　浩平　85～102
上州座繰器発生期の研究
…… 松浦　利隆　103～120
雲中妙音考
―阿弥陀聖衆来迎場面の復原―
…… 唐澤　至朗　121～136
上州国久作の六十二間小星兜について
―上州甲冑師の基礎的研究（三）―
…… 平野　進一　137～148
群馬県立歴史博物館紀要目録（第1～20号）

群馬県立歴史博物館

Gunma Prefectural Museum of History

出典：

秋池 武(2000)

「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義」

『群馬県立歴史博物館紀要』第21号

群馬県立歴史博物館　pp. 35–60

より 引用

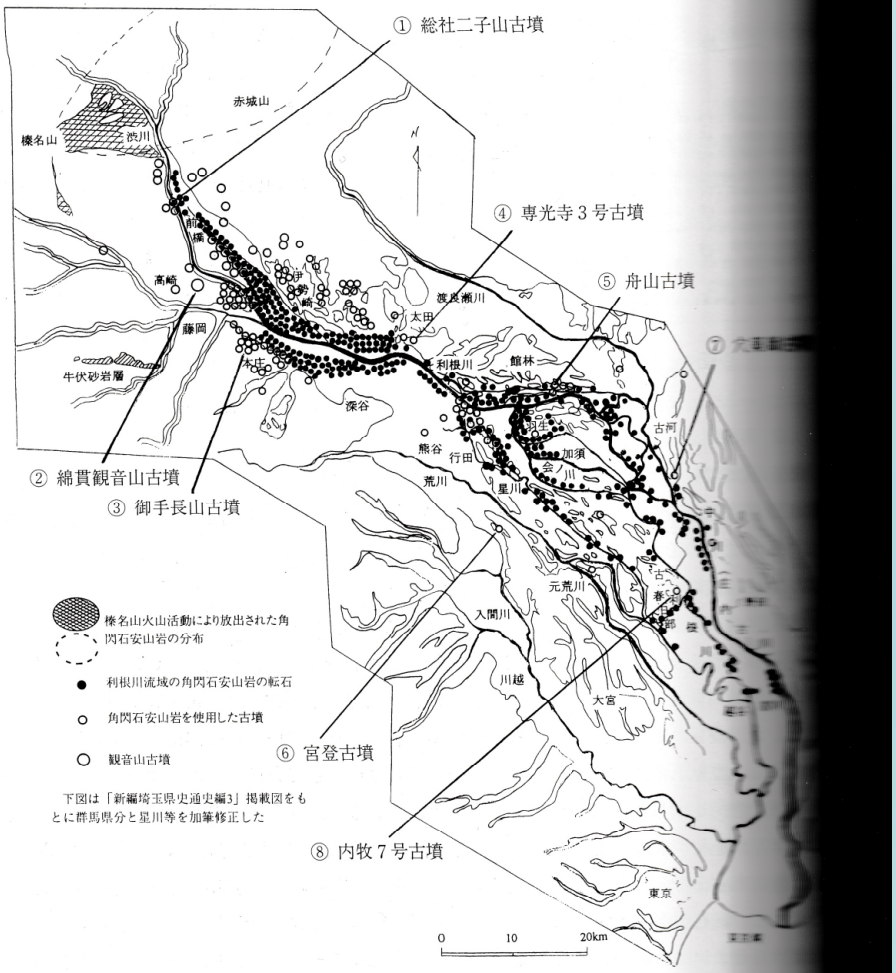
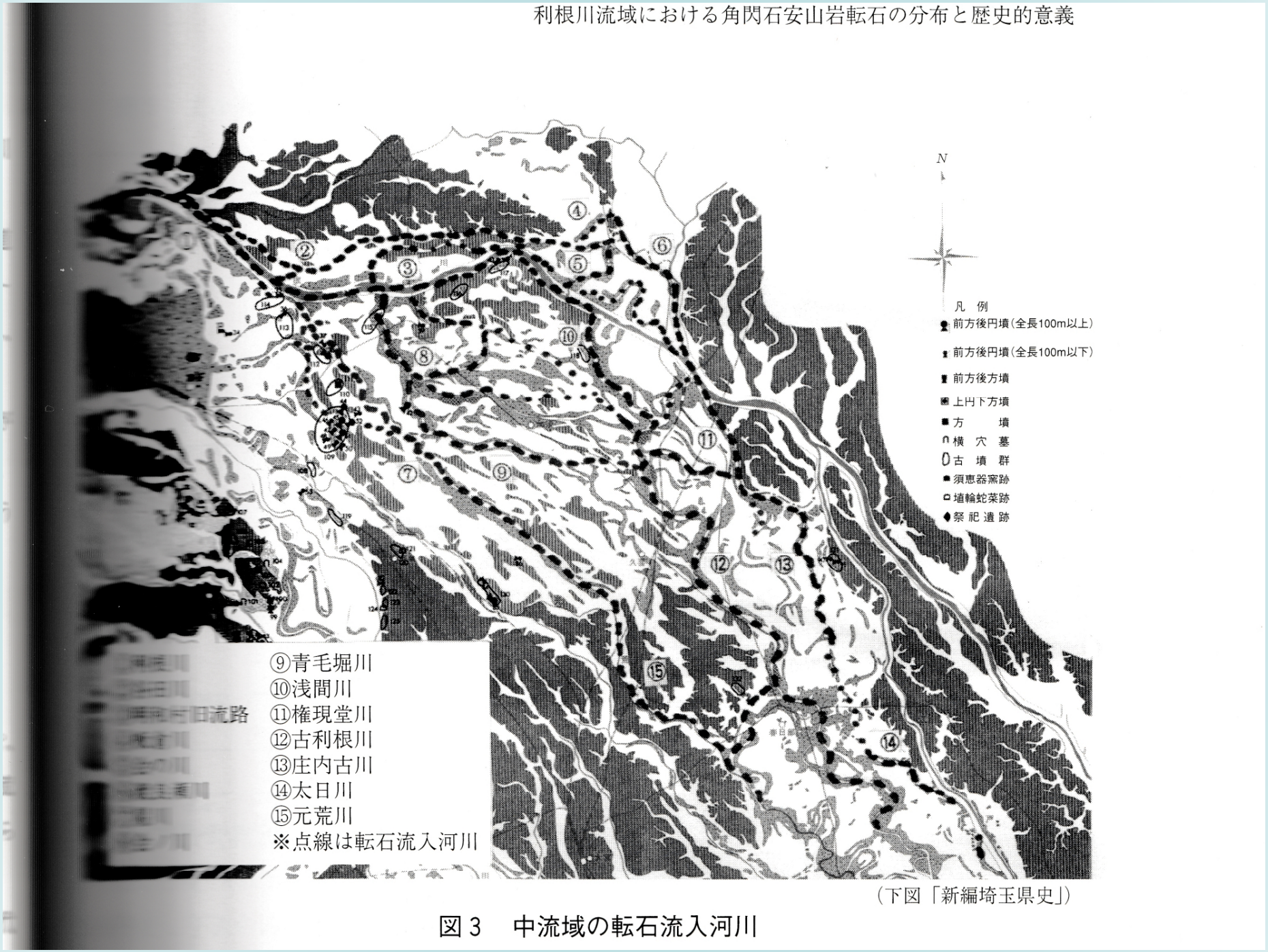


図2　流域の転石と古墳分布

認量が少ないが、砂丘等の発達により埋没している場所も多い。元荒川への転石は
田川からの流入である。元荒川の下流はかつての古隅田川である。

3　利根川流域の転石の特徴

利根川流域で採取される転石は軟質軽量で、100kmを流れる中で途中の自然



（下図「新編埼玉県史」）

図３　中流域の転石流入河川

3　利根川流域・分流域転石の詳細分布（下流域＝中川・東京低地）

所在		転石				
河川名	地域の特徴	分布状況（分布・所在）	量	規模	土質	備考
❼中川・東京低地	加須低地に続く地域で、西が大宮台地と武蔵野台地、東が猿島台地と下総台地に挟まれ東京湾に達する低地帯である。ここには利根川、渡良瀬川、荒川流域が合流するが、各流域が長期間にわたり入り交じった地域である。下流は河川改修と都市化により採取できない場所が多い。	転石は浅間川、渡良瀬川、会ノ川流域から集まる庄内古川・古利根川流域への流入量が多い。古利根川にはこの他青毛堀川、星川からの転石流入が見られる。	－	－	－	－
庄内古川（中川）～太日川 ❼－①	栗橋町高柳 No208 で浅間川、会ノ川と権現堂川を合わせ庄内古川（中川）本流を形成する。幸手市下吉羽からは猿島台地～房総台地西辺に沿って南流し、下流で太白川となり東京湾に達している。流域には自然堤防と広大な氾濫源が広がり、途中古利根川と連絡する旧河道の痕跡も多い。太日川流域は江戸川に併合されている部分も多いが、旧河道部に小転石が混入する。	浅間川、会の川、渡良瀬川から供給された転石が流入している。転石は高柳 208 の上流部で径５cm 前後、下吉羽 No228 から下流で径２～３ cm 程のものが主流となっている。転石量は下流の太日川分の松伏町 No236、吉川市 No237 等まででかなり多く確認することができる。流域約 1km に杉戸町目沼３号古墳がある。	多い	5～数cm	転量	備考
古利根川～（古隅田川） ❼－②	古利根川の上流は浅間川、会ノ川等が合流し久喜市、幸手市、杉戸市、春日部市、越谷市を経由して東京湾に達していたとされている。春日部市より下流は古隅田川となっている。流域には大型砂丘と広大な氾濫原が形成され転石を覆っている可能性が高い。この間、右岸からは羽生の会野川で分流して騎西町を経由し、鷲宮神社東方で古利根川と合流する青毛堀川がある。また、行田市で利根川本流から分流して騎西町～菖蒲町～蓮田町を流れ、岩槻市で元荒川に合流する星川がある。元荒川は春日部市で古隅田川となっていた。	流入後の砂丘発達等により転石確認量は多くない。上流からの転石は栗橋町高柳方面と青毛堀川、下流ではから流入して越谷まで確認できる。春日部市から古隅田川が分流しここにも径３ cm 程の転石が系統的に確認できる。転石はこの付近 No242 で径 4cm 程の転石がある。星川から元荒川に流入した径数 cm の小転石が岩槻市春日部市南（No222～246）まで確認できる。古隅田川から約 0,3km に内牧古墳群がある。	少量	5～数cm	転量	備考
元荒川～隅田川 ❼－③	元荒川は吹上市から鴻巣市を経由して蓮田市で星川と合流し春日部市で古隅田川となり、吉川市で再度古利根川下流と合流している。転石の流入は星川と古隅田川からある。	転石は星川と合流する蓮田市から確認できる。岩槻市 No240 で径４ cm 程の転石があり、古隅田川からの転石とあわせ春日部南まで確認できる。	少量	数cm	転量	備考

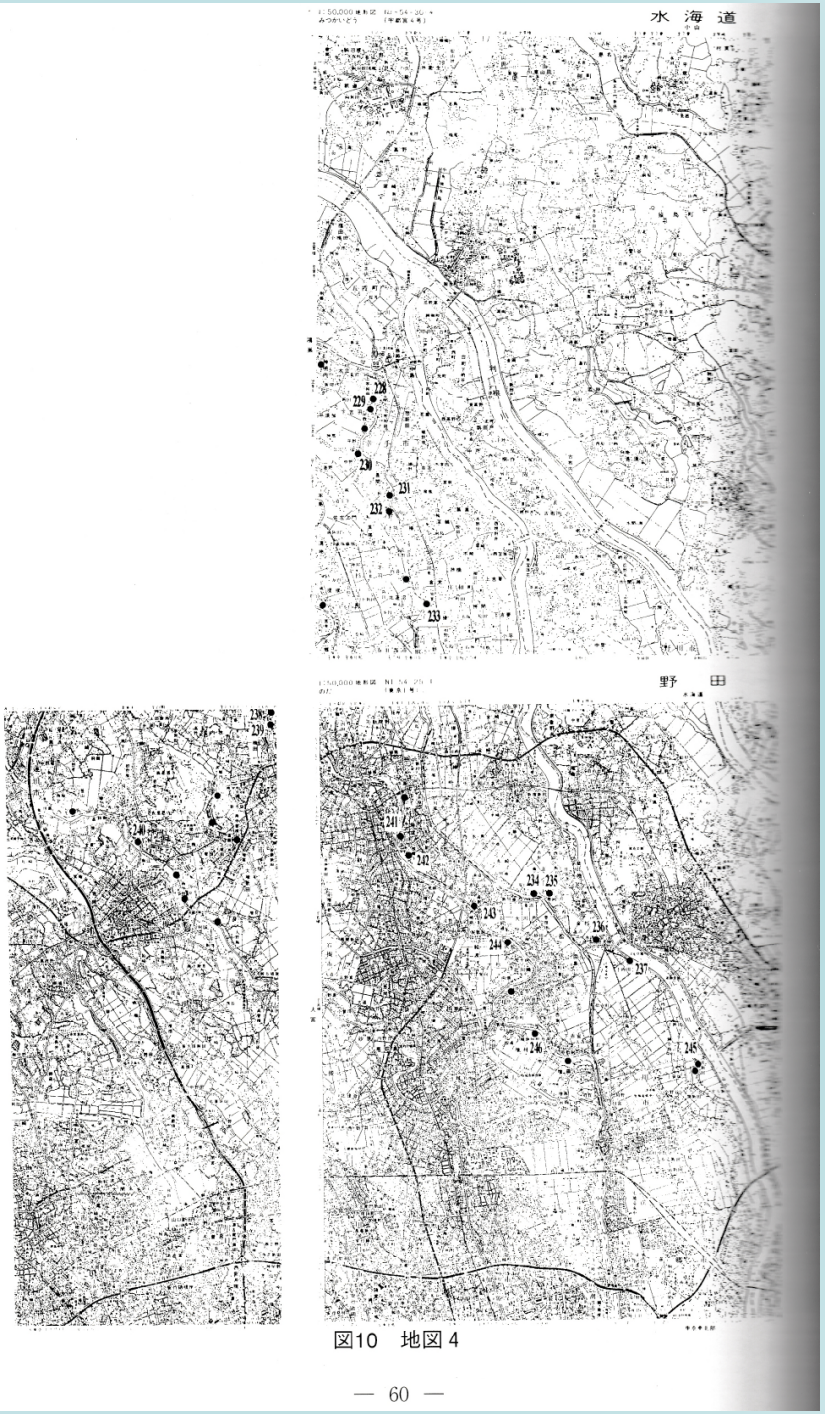


図10　地図４

河道変遷から見た越谷の地名
十丁免(十町目)１／６

写真は
神奈川県横浜市金沢区
金沢町212-1
「称名寺」と「阿字ヶ池」
(南西より望む)

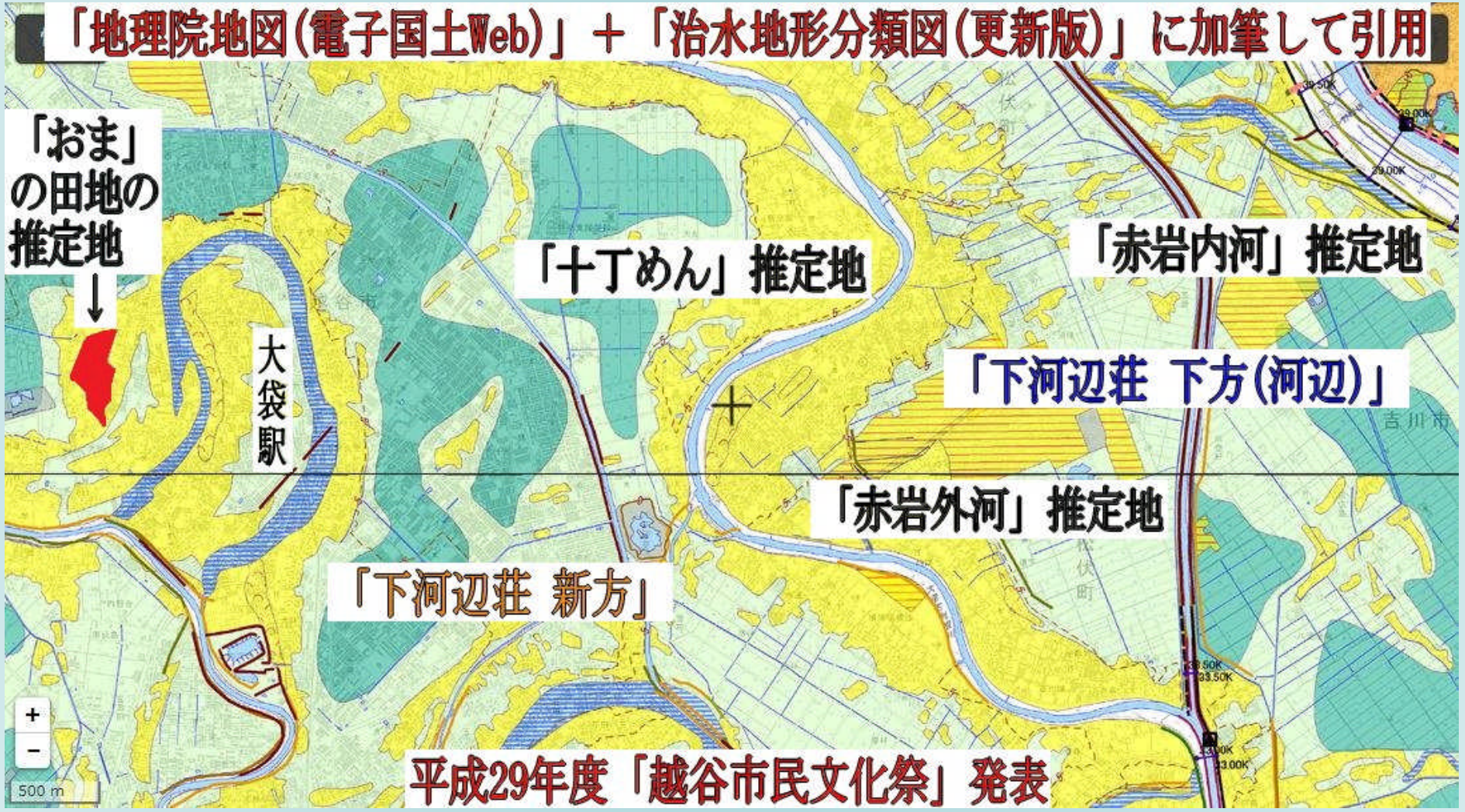
撮影：2009年3月26日



河道変遷から見た越谷の地名
十丁免(十町目)２／６

「享徳の乱」の最中である
康正二年(1456)七月
「直轄地」を押領された称名寺は
関東管領上杉氏に味方し
足利成氏と合戦中の上杉政真・太田資清・資長 等に
陣中見舞いを送る

出典：
「称名寺陣中見舞送状(金沢文庫文書)」
康正二年(1456)七月
六貫七百六十文内
二貫文 御屋形(上杉政真) 二貫文 太田殿 一貫文 源六殿


「地理院地図(電子国土Web)」＋「治水地形分類図(更新版)」に加筆して引用
「おま」の田地の推定地
↓
大袋駅
「十丁めん」推定地
「赤岩内河」推定地
「下河辺荘 下方(河辺)」
「赤岩外河」推定地
「下河辺荘 新方」
平成29年度「越谷市民文化祭」発表
500 m

河道変遷から見た越谷の地名
十丁免（十町目）３／６

『吉川市史 通史編』(2014)では
称名寺は
下河辺庄内に散在していた
「寺用分」の代替地として
下河辺庄・下方「赤岩郷」を
直轄地としたとある

ゆえに史料①②から
称名寺は
下河辺庄・新方「十丁免(十町目)」も
直轄地としたと推定

河道変遷から見た越谷の地名
十丁免(十町目)４／６

出典：

- 史料①：貞治二年(1363)七月七日
  貞治元年称名寺寺領年貢米納町(5550／203)
  『吉川市史』資料編 PP. 329-330 183

- 史料②：永徳二年壬戌(1382)
  下総国下河辺庄赤岩郷年貢銭結解帳(5589／239)
  『吉川市史』資料編 pp. 333-335 189

- 永井 晋(2014)
  『吉川市史 通史編』吉川市 pp. 163-164

貞治二年（一三六三）七月七日

称明寺々領年貢米納町（金沢文庫文書）

『三郷市史』第一巻　４６１頁　一六二

貞治元年称名寺寺領年貢米納町（五五五〇／二〇三）

『吉川市史』資料編　三二九・三三〇頁　一八三

（端裏書）

「貞治元年称名寺々領年貢米納帳」

［中略］

柒（七）石参（三）斗伍（五）升十丁免年貢分納

［後略］

月日未詳

永徳二年壬戌（一三八二）

赤岩十四箇村年貢銭結解帳（金沢文庫文書）

『三郷市史』第一巻　四六六頁　二六九

下総国下河辺庄赤岩郷年貢銭結解帳（五五八九／二三九）

『吉川市史』資料編　三三三～三三五頁　一八九

（端裏書）

「□□十四ヶ村結解帳永徳二年　　定仙」

注進

［中略］

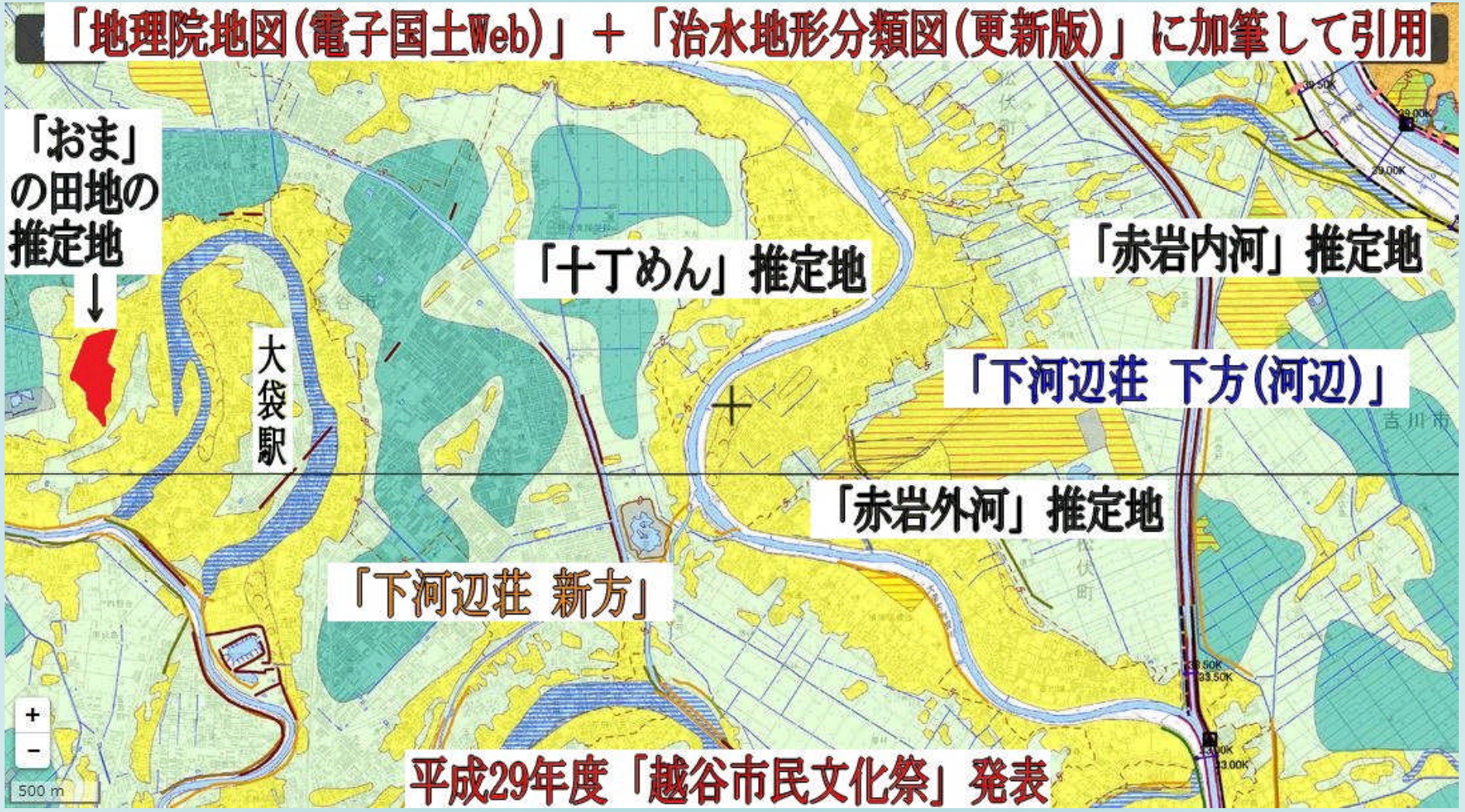
拾陸貫参佰文　新方十町目請取之時勘料

此内三百文茶一斤代

［後略］

河道変遷から見た越谷の地名
十丁免(十町目)５／６

称名寺の「直轄地」に
新方「十丁免(十町目)」が含まれていたのであれば
「享徳の乱」の最中である
康正二年(1456)七月に
古河公方の勢力は
①現・大落古利根川の左岸である
　下方「赤岩郷」
　だけではなく
　より岩付に近い
②現・大落古利根川の右岸である
　新方「十丁免(十町目)」も
　押領していたと推定可能


「地理院地図(電子国土Web)」＋「治水地形分類図(更新版)」に加筆して引用
「おま」の田地の推定地
↓
大袋駅
「十丁めん」推定地
「赤岩内河」推定地
「下河辺荘 下方(河辺)」
「赤岩外河」推定地
「下河辺荘 新方」
平成29年度「越谷市民文化祭」発表
500 m

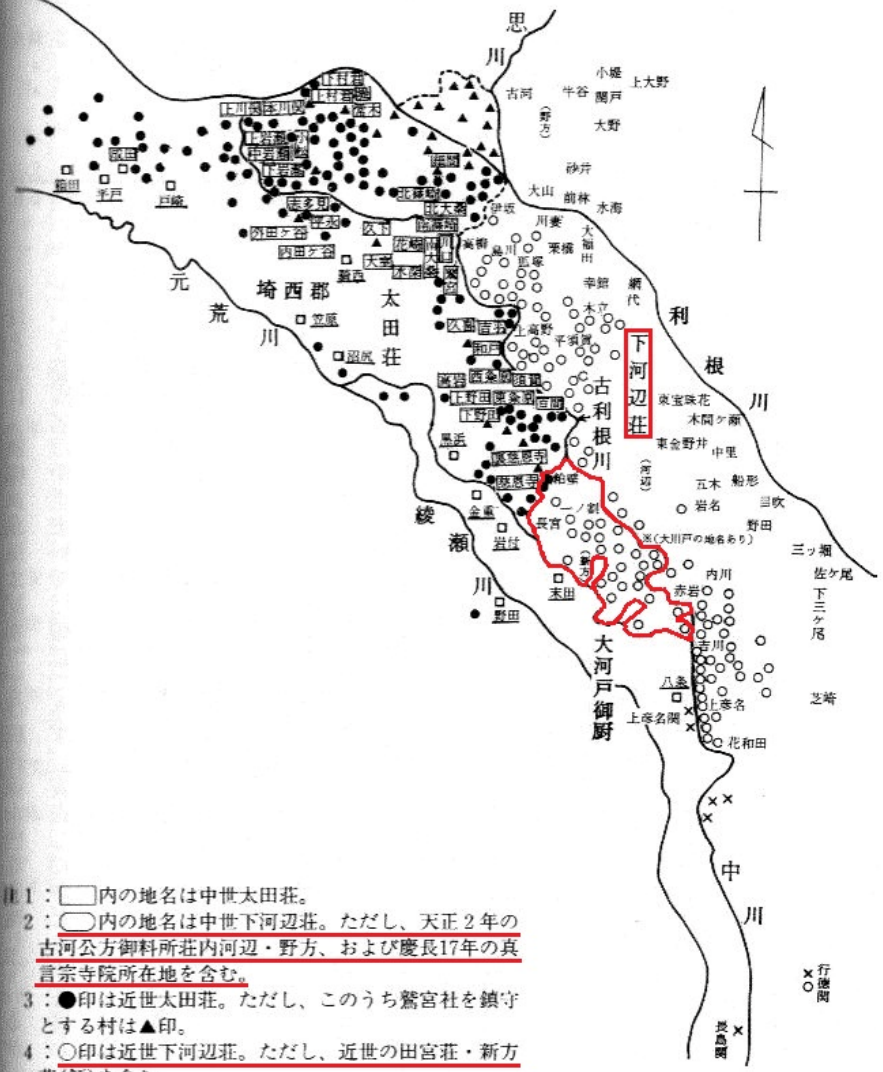
河道変遷から見た越谷の地名
十丁免(十町目)６／６

写真は
「十丁免(十町目)」比定地の
旧　向畑村堂面(越谷市)
観音堂

撮影：2012年11月4日



図５　武蔵国太田庄・下総国下河辺荘荘域図



注１：□内の地名は中世太田荘。
２：□内の地名は中世下河辺荘。ただし、天正２年の古河公方御料所荘内河辺・野方、および慶長17年の真言宗寺院所在地を含む。
３：●印は近世太田荘。ただし、このうち鷲宮社を鎮守とする村は▲印。
４：○印は近世下河辺荘。ただし、近世の田宮荘・新方荘(領)を含む。
５：×印は河関。――は旧河道。
６：野方・河辺・新方は、下河辺荘の三つの地域区分である。

出典：

原田 信男(1999)

『中世村落の景観と生活』

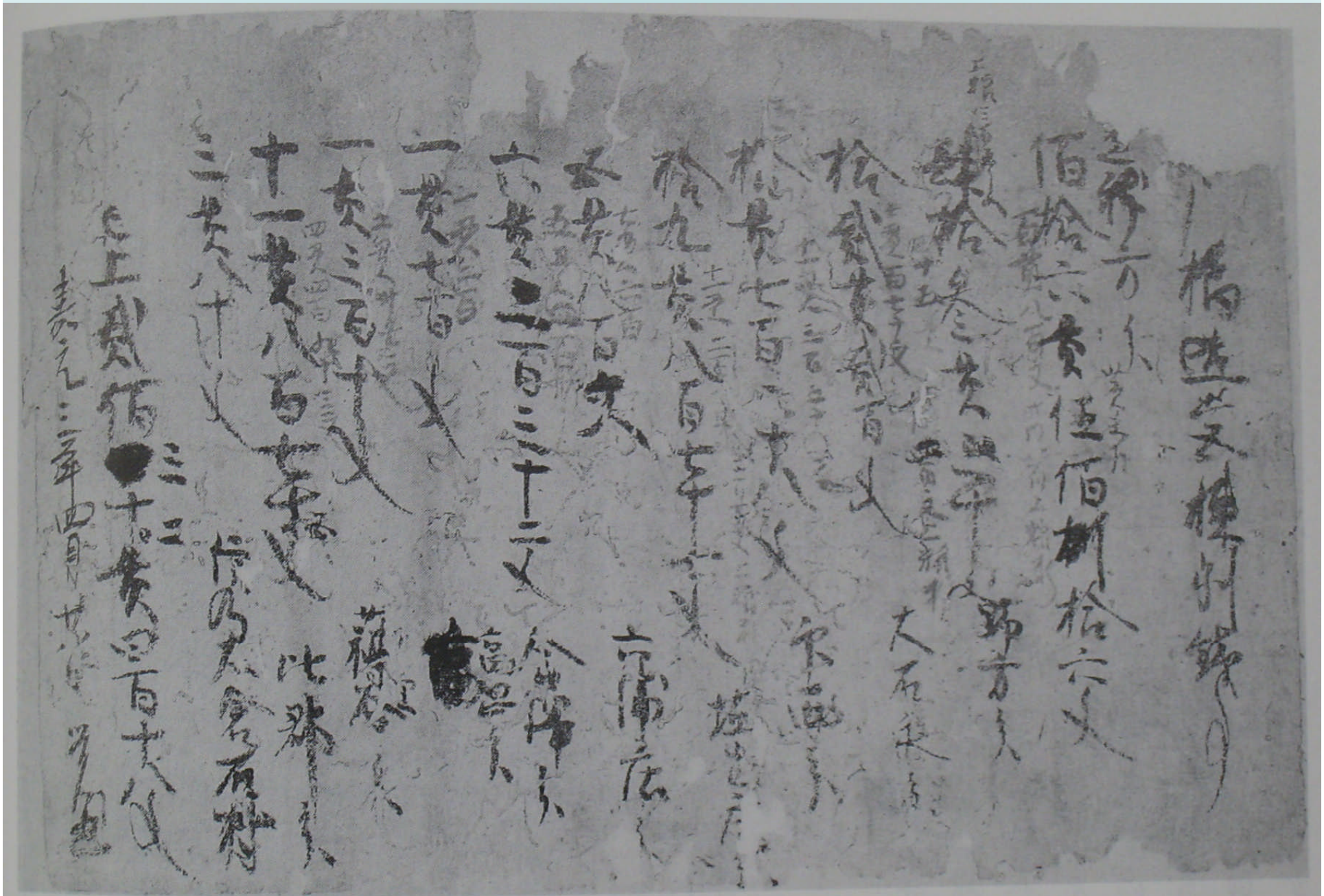
思文閣出版 p. 64

図5 武蔵国太田荘・下総国下河辺荘荘域図

より 引用・加筆

河道変遷から見た越谷の地名
新方（最も古い地名）

越谷市内 の地名の中で
「一次史料」 として確実に現れる
「最も古い地名」 は
嘉元（かげん）三年（1305）四月二十八日
「六浦（むつら）瀬戸橋造営
棟別銭（むなべちせん）注文案」
（金沢文庫文書 通し番号 5249号／
整理番号 14号）
に記載される
①「新方（にいがた）」



141　六浦瀬戸橋造営棟別銭注文案（称名寺蔵　神奈川県立金沢文庫保管）

出典：

吉川市史編さん委員会編(2009)

『吉川市史 資料編 原始・古代・中世』

吉川市　p. 288

より 引用

河道変遷から見た越谷の地名

おま(恩間)・十丁めん(免)(２番目に古い)

「２番目に古い地名」は
嘉暦(かりゃく)元年(1326)十月三日
「下河辺庄(しもこうべのしょう)
新方(にいがた)検見帳(けみちょう)」
(金沢文庫文書 通し番号 5395号／
整理番号 78号)
に記載される
①「おま(恩間)」
②「十丁めん(十丁免)」

（端裏書）
「新方検見帳　嘉暦元年」

（新方）にいかたのけん（検見）ミちやう

合

四反卅分　まこ二郎
四反六十分　しよう三郎
五反　へい二郎
四反六十分　いやとうし
五反　くゑさう三郎

已上四丁　分米八石
合二丁二反小卅分

一丁六反半卅分そん（損）　七
三石五斗一升六合　七

十丁めん（免）分
（恩間）おまの分
分米四石四斗二升五合　五　一
（恩間）おまの分

七反　大夫五郎
六反大　ちう大郎
九反九十分　又大郎
三反小　五郎四郎

三反半　まこ三郎
八反三十分　大夫六郎
□反小　せんけう
□反七十分　にうゑん
四反三百分　二郎大郎
□□九十分　いや大郎
二反三百卅分　ゆいくわん
□反七十五分　いや三郎
□反大卅分　大夫大郎
四反　六郎二郎
四反十分　まこ大郎
合　八丁四反小十五分　（得田）とくてん

已上　分米　十六石九斗六升二合

そん（損）の分田　六丁三反小四十五分　そん十二石七斗□升五合

已上十四丁七反三百分　分米廿九石五斗七升七合

ちやうの米　合廿一石四斗九升七合

□□分八丁一反十五分　十六石二斗四升一合　そん

（嘉暦）かりやくわん（元）年十月三日

へい太郎（花押）

出典：

吉川市史編さん委員会編(2009)

『吉川市史 資料編 原始・古代・中世』

吉川市　p. 297

より 引用・加筆


情報
機能
「おま」
の田地の
推定地
↓
大袋駅
「十丁めん」推定地
「赤岩内河」推定地
「赤岩外河」推定地
吉川市
+
−
500 m

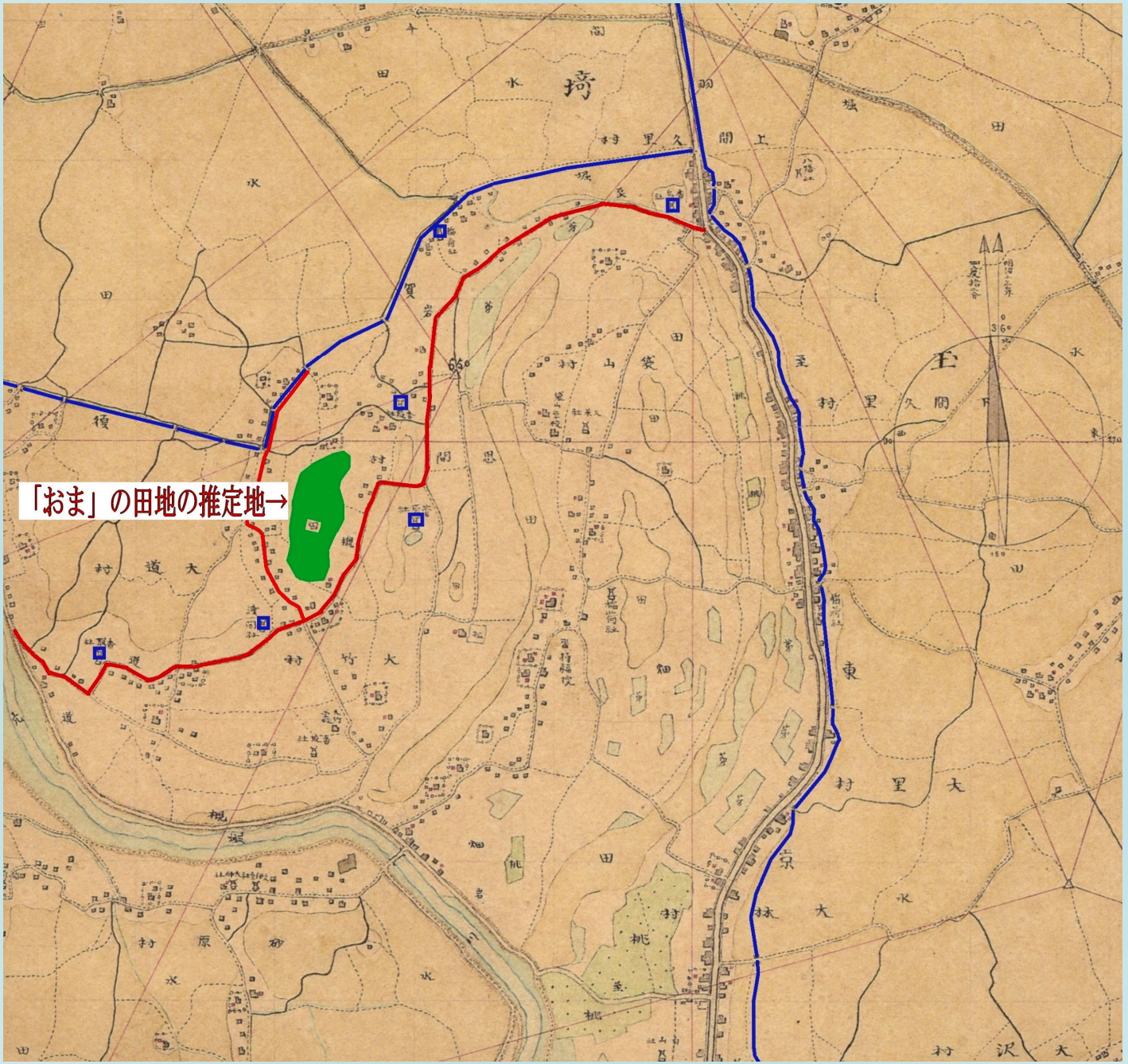

情報
機能
「おま」の
田地の推定地
↓
大袋駅
300 m

出典：

国土交通省 国土地理院

「治水地形分類図（更新版）」

より 引用・加筆


「おま」の田地の推定地→

出典：

「明治前期測量

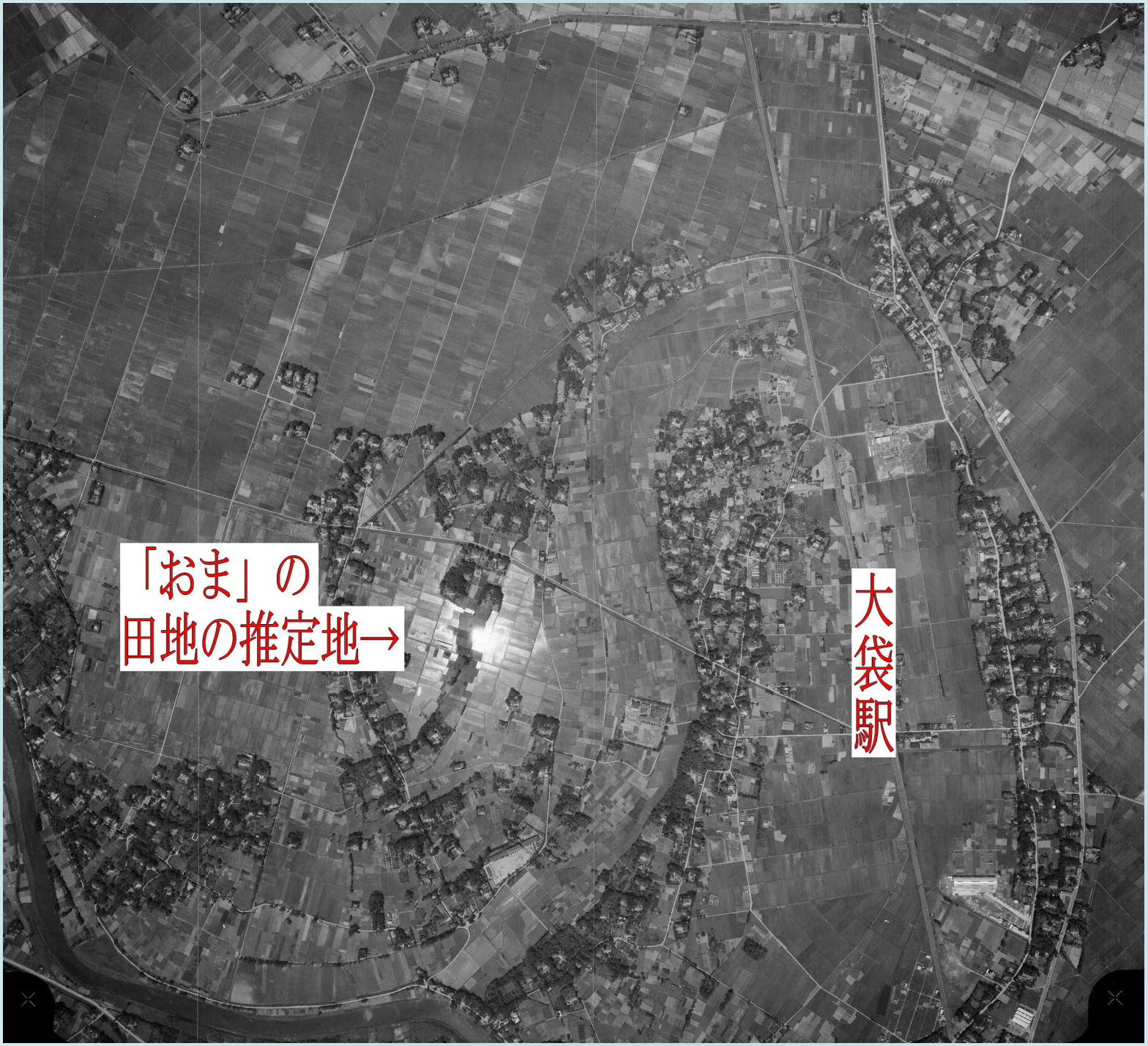
二万分の一フランス式彩色地図

－ 第一軍管地方二万分一**迅速測図** －

埼玉県武蔵国南埼玉郡

平方村及恩間邨近傍」

より　引用・加筆


「おま」の
田地の推定地→
大袋駅

出典：

国土交通省 国土地理院

「地図・空中写真閲覧サービス」

MKT-613-C34-5

(昭和36年(1961)6月11日撮影)

より 引用・加筆

出典：

秦野 秀明(2017)

「下河辺庄新方「おま」の「田地」を探る」

平成29年度「越谷市民文化祭」

より 引用・加筆

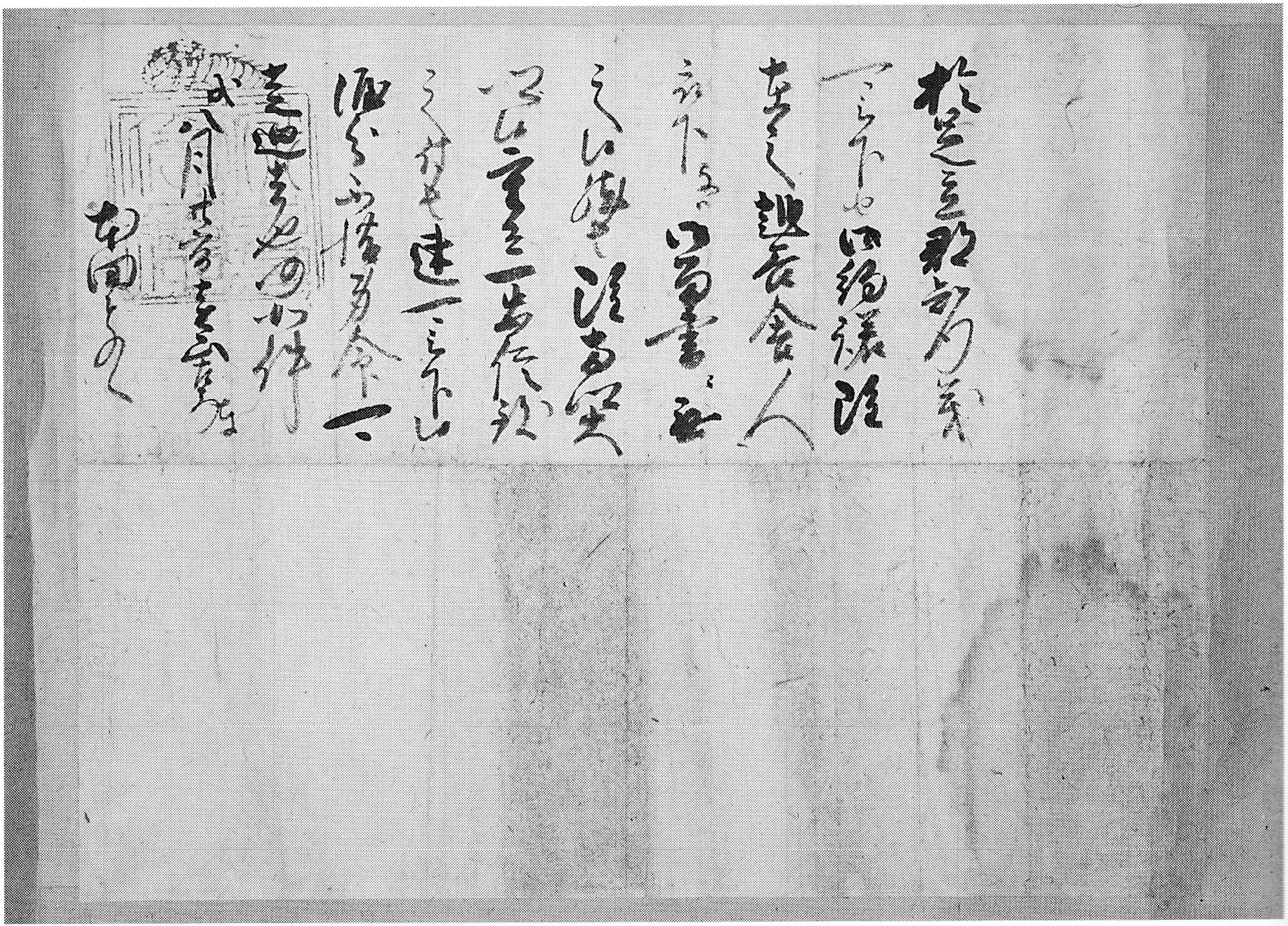
http://koshigayahistory.org/

231104_171112_niigata_oma_h_h.pdf

河道変遷から見た越谷の地名
越谷１／２

永禄5年(1562)当時
「越谷郷」は
「埼西郡」であったのか？
「足立郡」であったのか？

出典：
(永禄5年(1562))8月26日
北条家印判状(本田文書)



254　北条家印判状（本田文書）

二五四　〔永禄五年〕（一五六二）八月二十六日

後北条氏、本田氏に足立郡内の地を知行地として与えるが、越谷・舎人については重ねての忠信によって与えるという。

北条家印判状（本田文書）

於足立郡知行義（ママ）可被下由、御約諾雖在之、越谷・舎人被下与ハ御留書ニ無之候、然者雖両郷大郷候、重而一忠信致之付者、速可被下候、涯分不惜身命可走廻者也、仍如件

戌
（永禄五年）
八月廿六日

（虎朱印、印文「禄寿応穏」）

遠山左衛門奉

本田とのへ

〔読み下し〕

足立郡において知行義（ママ）下さるべき由、御約諾これあるといえども、越谷・舎人下さるとは御留書にこれ無く候、しからば両郷は大郷候といえども、重て一忠信これをいたすについては、すみやかに下さるべく候、涯分身命をおしまず走り廻るべきものなり、よってくだんのごとし、

出典：吉川市史編さん委員会編(2009)

『吉川市史 資料編 原始・古代・中世』

吉川市　p. 297

より 引用

河道変遷から見た越谷の地名
越谷２／２

古代・中世は
下総国葛飾郡「下河辺荘新方」であった
現・越谷市北越谷地区付近の
近世前期を表現した「絵図」に
「氷川前」の「字(あざ)名」

出典：
江澤 昭融 天保十一年(1840)
『大沢町古馬筥』

古絵図提出表

氷川系

位氷川神社ニテ宮島家引継ノ記文

一 古絵図ヲ氷川系トシテ所蔵ノ面ノ内氷川系ト記シアリ
ヨリ辻耕作ノ提出ヲモトメ参考ニ古絵図トシテ加ヘシ

出典：

江澤 昭融

天保十一年(1840)

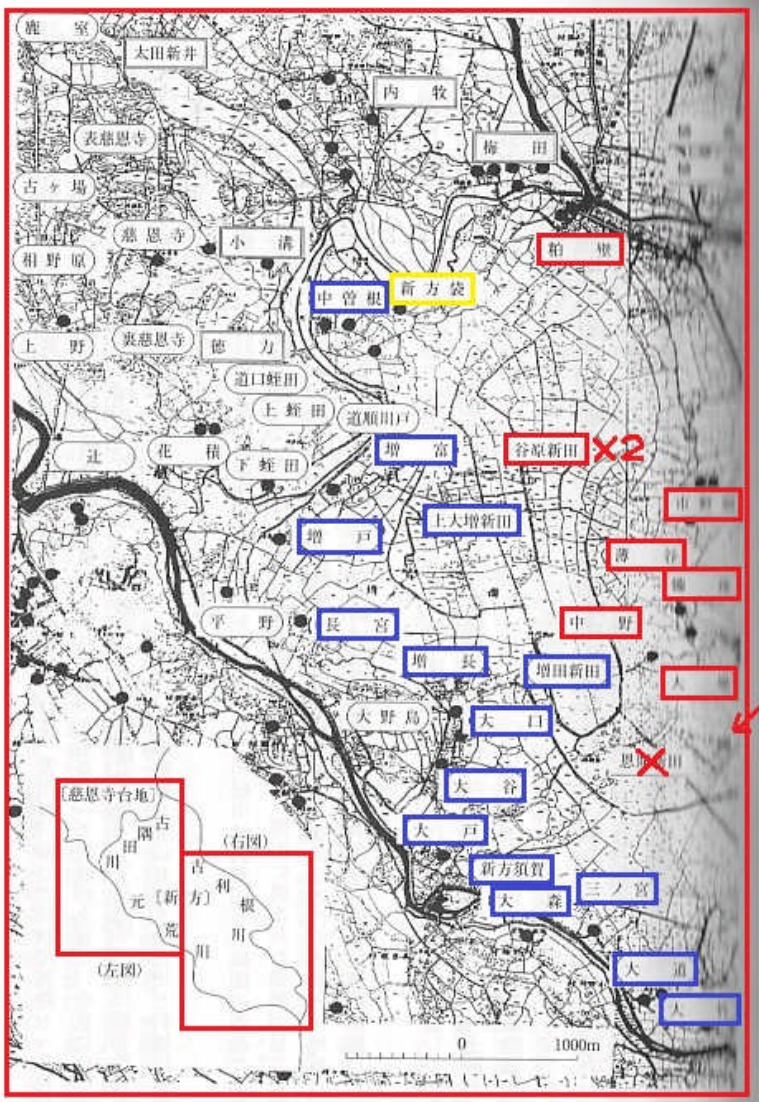
『大沢町古馬筥』

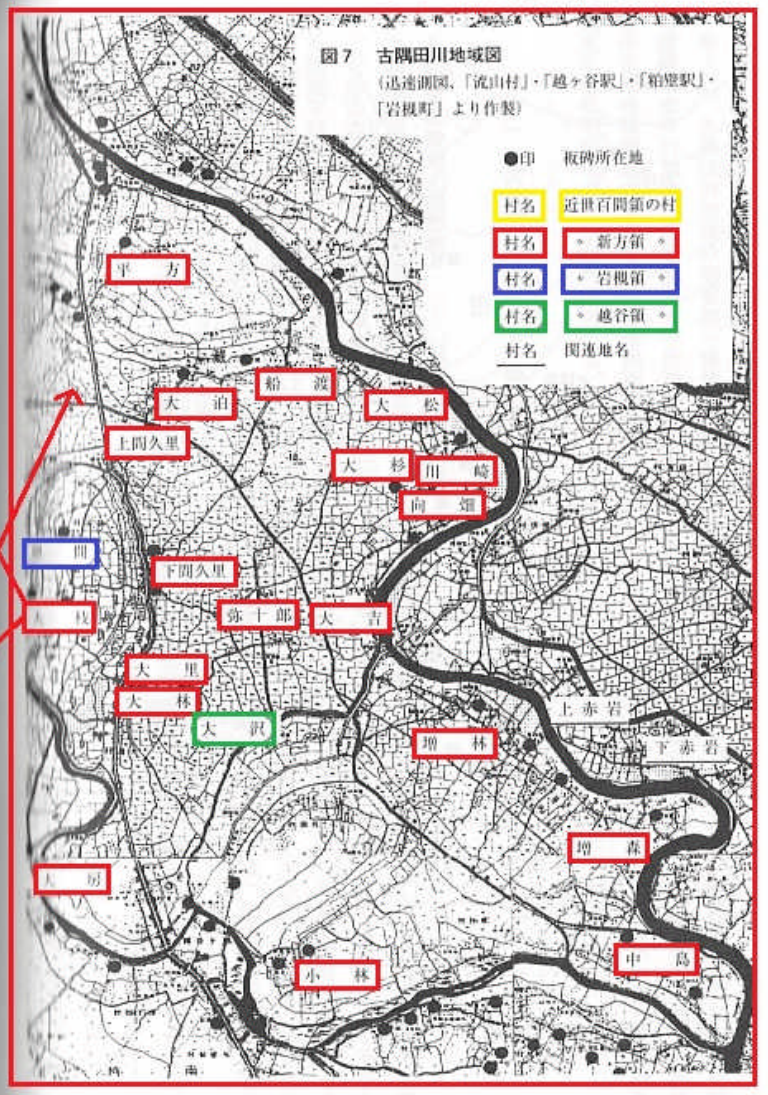
より 引用

近世前期における「埼玉郡の再編成」１／９

「武蔵・下総国境の移動」の変遷において
遅くとも慶長17年(1612)以前に
下総国より武蔵国へ編入(注1)されていた地域は
「中世の下総国(葛飾郡)下河辺荘新方(にいがた)」
凡そ現在の
「古隅田川・元荒川・大落古利根川」で囲まれた地域
この地域は「近世の新方領」とは範囲が異なる

※「中世の下総国(葛飾郡)下河辺荘新方」の範囲は
近世の新方領27ヶ村・岩槻領16ヶ村・
百間(もんま)領1ヶ村・越ヶ谷領1ヶ村
から構成


鹿　室
太田新井
内　牧
表慈恩寺
梅　田
古ヶ場
慈恩寺
小　浦
相野原
船　壁
中曽根
新方袋
上　野
裏慈恩寺
徳　方
道口蛭田
上蛭田
道順田戸
増　宮
谷原新田
×2
辻
花　積
下蛭田
上大増新田
増　戸
平　野
長　宮
中　野
増　長
増田新田
大野島
大　口
大　谷
大　戸
新方須賀
大　森
三ノ宮
大　道
慈恩寺台地
古隅田川
元荒川
古利根川（新方）
（右図）
（左図）
0
1000m


図7　古隅田川地域図
（迅速測図、「流山村」・「越ヶ谷駅」・「粕壁駅」・「岩槻町」より作製）
●印　板碑所在地
村名　近世百間領の村
村名　〃　新方領　〃
村名　〃　岩槻領　〃
村名　〃　越谷領　〃
村名　関連地名
平　方
船　渡
大　松
大　泊
上間久里
大　杉
田　崎
向　畑
下間久里
弥十郎
大　吉
大　里
大　林
大　沢
増　林
上赤岩
下赤岩
増　森
小　林
中　島

出典：

鈴木 哲雄(2005)

「中世利根川下流域」

『中世関東の内海世界』

岩田書院　pp. 84, 85

図7 古隅田川地域図

より 引用・加筆

近世前期における「埼玉郡の再編成」２／９

「中世の下総国(葛飾郡)下河辺荘新方」が
遅くとも慶長17年以前に
下総国より武蔵国へ編入された時点で
編入先の武蔵国においては
「古代の埼玉郡」の範囲は中世以降に解体されており
「古代の埼玉郡」の東の地域に「太田荘」
「古代の埼玉郡」の西の地域に「埼西郡」
が元の郡を分割して成立(注2)

古代の「郡」が中世以降に解体されていた例として
「下河辺荘」「葛東郡(風早荘等はこの説明では省略)」
「葛西郡(葛西御厨はこの説明では省略)」が
元の郡を分割して成立(注3)していた「葛飾郡」がある

近世前期における「埼玉郡の再編成」３／９

編入された時点

「太田荘」「埼西郡」「(武蔵国)葛飾郡」が存在

近世前期の寛文年間

と推測される時期に

「埼玉郡の再編成」が行われ

「太田荘」「埼西郡」「(武蔵国)葛飾郡」が

「合併」した形で

「近世の埼玉郡」が成立(注4)

したと推測

近世前期における「埼玉郡の再編成」４／９

(注1)
①「武蔵国埼西郡平方郷」天正19年(1591)11月
平方村林西寺寺領朱印状(林西寺文書)
②「大光寺領武州新方之庄長宮」慶長17年(1612)
長宮大光寺検地帳(大光寺文書)
③「武州新方糟壁最勝院」慶長17年(1612)8月
関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
④「武州埼西郡新方庄粕壁村」寛永6年(1629)
粕壁村検地帳(中島家文書)
⑤「武州埼西郡東新方庄六ヶ村」寛永6年(1629)
大松村清浄院領検地帳(清浄院文書)

近世前期における「埼玉郡の再編成」５／９

(注2)
①「武州新方糟壁最勝院」慶長17年(1612)8月
関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
②「武州太田荘百間山西光院」慶長17年(1612)8月
関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
③「武州大田荘篠崎普門寺」慶長17年(1612)8月
関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
④「武州大田荘羽生正覚院」慶長17年(1612)8月
関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)

近世前期における「埼玉郡の再編成」６／９

(注2)
⑤「武州奇西郡白岡正福院」慶長17年(1612)8月
　関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
⑥「武州崎西築道金剛院」慶長17年(1612)8月
　関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
⑦「武州崎西正能竜花院」慶長17年(1612)8月
　関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
⑧「武州崎西郡多門寺」慶長17年(1612)8月
　関東八州真言宗連判留書(醍醐寺文書)
(注3)
出典：長塚 孝(1995)「鎌倉・室町期の葛西地域」
　　『東京低地の中世を考える』名著出版 pp. 95-100

近世前期における「埼玉郡の再編成」７／９

(注4)

①「武蔵国埼西郡平方村」寛永19年(1642)9月24日
平方村林西寺寺領朱印状(林西寺文書)
「武蔵国埼玉郡平方村」寛文5年(1665)7月11日
平方村林西寺寺領朱印状(林西寺文書)

②「武蔵国埼西野嶋村」寛永19年(1642)9月15日
野嶋村浄山寺寺領朱印状(浄山寺文書)
「武蔵国埼玉郡野嶋村」寛文5年(1665)7月11日
野嶋村浄山寺寺領朱印状(浄山寺文書)

③「武蔵国埼西大佐美郷」寛永13年(1636)11月9日
西方村大聖寺寺領朱印状写(大聖寺文書)
「武蔵国埼玉郡大佐美郷」寛文5年(1665)7月11日
西方村大聖寺寺領朱印状写(大聖寺文書)

近世前期における「埼玉郡の再編成」８／９

(注4)

④「武蔵国埼西腰谷瓦曾禰」寛永13年(1636)11月9日
瓦曽根村照蓮院寺領朱印状写(照蓮院文書)
「武蔵国埼玉郷腰谷郡瓦曾根村」寛文5年(1665)7月11日
瓦曽根村照蓮院寺領朱印状写(照蓮院文書)

⑤「武蔵国埼西郡越ヶ谷村」天正19年(1591)11月 日
越ヶ谷宿天嶽寺寺領朱印状写(天嶽寺文書)
「武蔵国埼玉郡越谷郷」寛文5年(1665)7月11日
越ヶ谷宿天嶽寺寺領朱印状写(天嶽寺文書)

⑥「武蔵国埼西越谷郷」寛永13年(1636)11月9日
四町野村迎摂院寺領朱印状写(迎摂院文書)
「武蔵国埼玉郡越谷郷」寛文5年(1665)7月11日
四町野村迎摂院寺領朱印状写(迎摂院文書)

近世前期における「埼玉郡の再編成」９／９

(注4)

⑥「武蔵国埼西越谷郷」寛永13年(1636)11月9日
四町野村迎摂院寺領朱印状写(迎摂院文書)
「武蔵国埼玉郡越谷郷」寛文5年(1665)7月11日
四町野村迎摂院寺領朱印状写(迎摂院文書)

⑦「武蔵国葛飾郡大房村」慶安元年(1648)9月17日
大房村浄光寺寺領朱印状(浄光寺文書)
「武蔵国埼玉郡平方村」貞享2年(1684)6月11日
大房村浄光寺寺寺領朱印状(浄光寺文書)

⑧「武蔵国葛飾郡大泊村」慶安元年(1648)9月17日
大泊村安国寺寺領朱印状(安国寺文書)
「武蔵国埼玉郡大泊村」貞享2年(1684)6月11日
大泊村安国寺寺領朱印状(安国寺文書)

「延宝4年(1676)12月9日　寺社奉行達書」から見た「武総国境の移動」

「江戸幕府は延宝4年(1676)12月9日、寺社奉行達書で幸手不動院の霞場を下総国一円とした(不動院文書)。このとき、幕府は「近来葛飾東西二に相分、西者武州江入」れたにもかかわらず、不動院の戦国時代からの由緒を重んじ、「往古者下総国葛飾郡境」であった「栗橋より西古利根川筋猿ヶ俣舟渡隅田川浅草川筋」を霞場としての下総国境とした。この史料から、古利根川−隅田川−浅草川の古代・中世以来の武総国境が下総国葛飾郡内に移り、同郡内を二分して設けられたことを知ることができる」

出典：武井　尚(1993)「利根川の流路と国境」
『中川水系Ⅲ　人文』埼玉県 p. 117

延宝四年(1676)十二月九日　寺社奉行連署達書

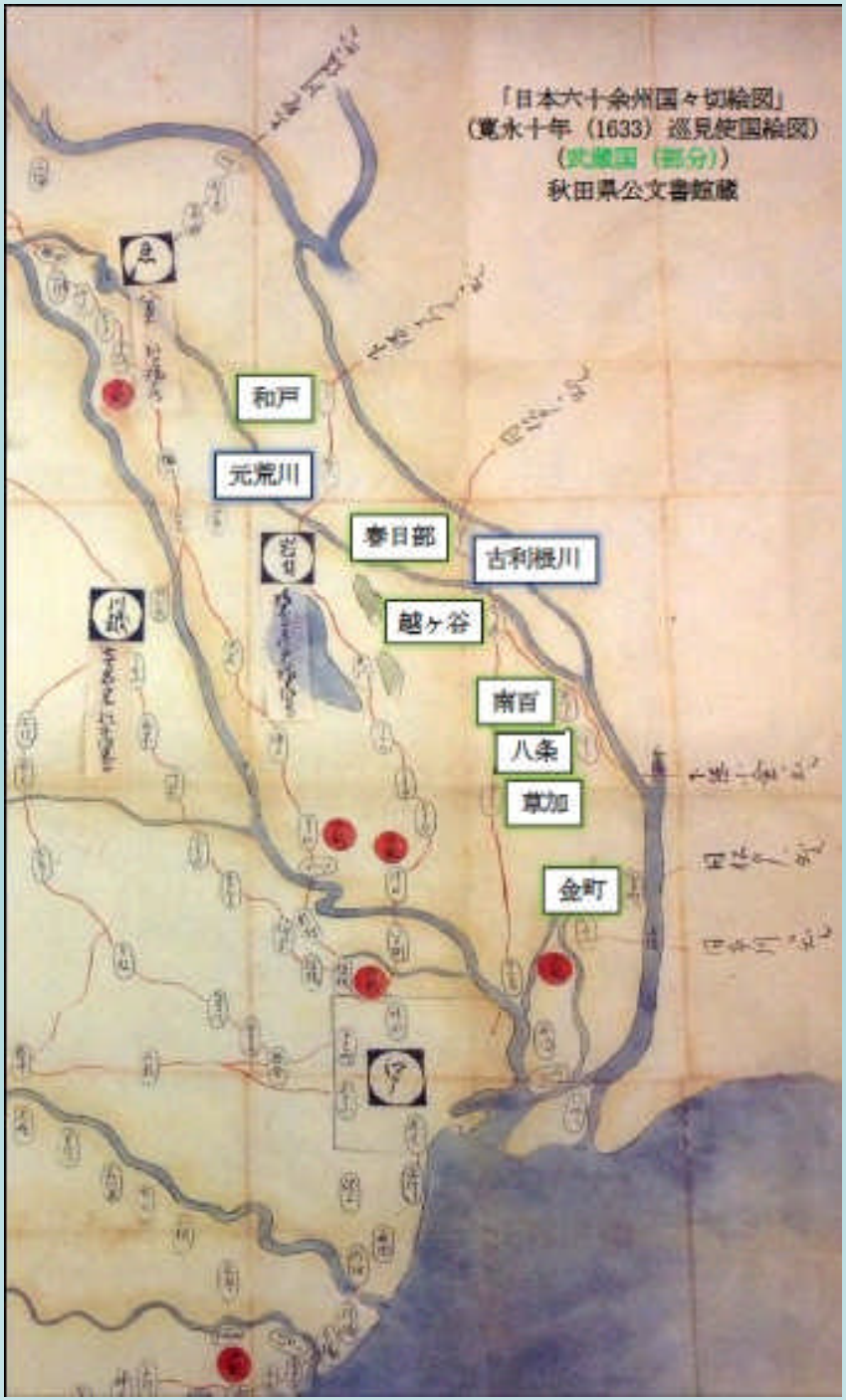
覚

栗橋より西　古利根川筋、猿ヶ俣舟渡・隅田川・浅草川筋、
往古者　下総国葛飾郡境たりといへとも、
近来　葛飾東西二に相分、西者　武州江入候、
依之(これによりて)不動院領之　御朱印にも、
武蔵国葛飾郡与(と)被成下、且又聖護院御門跡之証文、
下総国一円に不動院可為霞之由有之上者、
今　以右之川筋を境、不動院進退不可有相違者也、

(寺社奉行・本多忠利)
延宝四　丙辰　年十二月九日　本　長門（印）
(寺社奉行・太田資次)
太　摂津（印）
(寺社奉行・小笠原長頼)
小　山城（印）

(葛飾郡)
幸手
不動院

出典：埼玉県編(1987)『新編埼玉県史 資料編 18 中世・近世 宗教』 埼玉県 pp. 680-681
にルビを加筆


「日本六十余州国々切絵図」
（寛永十年（1633）巡見使国絵図）
（武蔵国（部分））
秋田県公文書館蔵
和戸
元荒川
春日部
古利根川
越ヶ谷
南百
八条
草加
金町

出典：

「日本六十余州国々切絵図」

(寛永十年(1633)巡見使国絵図)

「武蔵国」

秋田県立公文書館蔵

より　部分引用・加筆


「日本六十余州国々切絵図」
(寛永十年（1633）巡見使国絵図)
（下総国（部分））
秋田県公文書館蔵
栗橋
幸手
杉戸
庄内古川
古利根川
吉川

出典：

「日本六十余州国々切絵図」

(寛永十年(1633)巡見使国絵図)

「下総国」

秋田県立公文書館蔵

より　部分引用・加筆

武蔵・下総の国境「移動」後「2国」に存在した葛飾郡１／５

武蔵・下総国境が移動したにも関わらず
豊島・葛飾郡境は移動しなかった
つまり
下総国葛飾郡の該当地域が
武蔵国豊島郡にはならず
現・東京都に所属する地域となる
近世の武蔵国葛飾郡西葛西領・東葛西領
が発生

武蔵・下総の国境「移動」後
「2国」に存在した葛飾郡２／５

武蔵・下総国境の移動により
武蔵国に葛飾郡が発生したのは
現・東京都に所属する地域となる
近世の武蔵国葛飾郡西葛西領・東葛西領だけではなく
現・埼玉県に所属する地域となる
近世の武蔵国葛飾郡
(南から)
二郷半領・松伏領・幸手領・島中川辺領がある
その時期は寛永4年(1627)～寛永14年(1637)と推定

出典：武井　尚(1993)「利根川の流路と国境」
『中川水系Ⅲ　人文』埼玉県 pp. 113-120

武蔵・下総の国境「移動」後
「2国」に存在した葛飾郡３／５

注意すべきは
現・埼玉県に所属する地域で
近世の武蔵国葛飾郡松伏領、幸手領と
近世の下総国葛飾郡庄内領との
境界は
「江戸川」ではなく
「庄内古川」であること

明治8年(1875)
「江戸川以西・庄内古川以東」が
千葉県から埼玉県に移管

武蔵・下総の国境「移動」後
「2国」に存在した葛飾郡４／５

近世の武蔵国葛飾郡幸手領
（近世の武蔵国葛飾郡（関宿藩領）の地域は除く）は
慶長20年（1615）～寛永14年（1637）に
下総国猿島郡より
武蔵国葛飾郡になった
と推定

出典：原 太平（2002）『幸手市史 通史編Ⅰ』
幸手市教育委員会 pp. 358-387

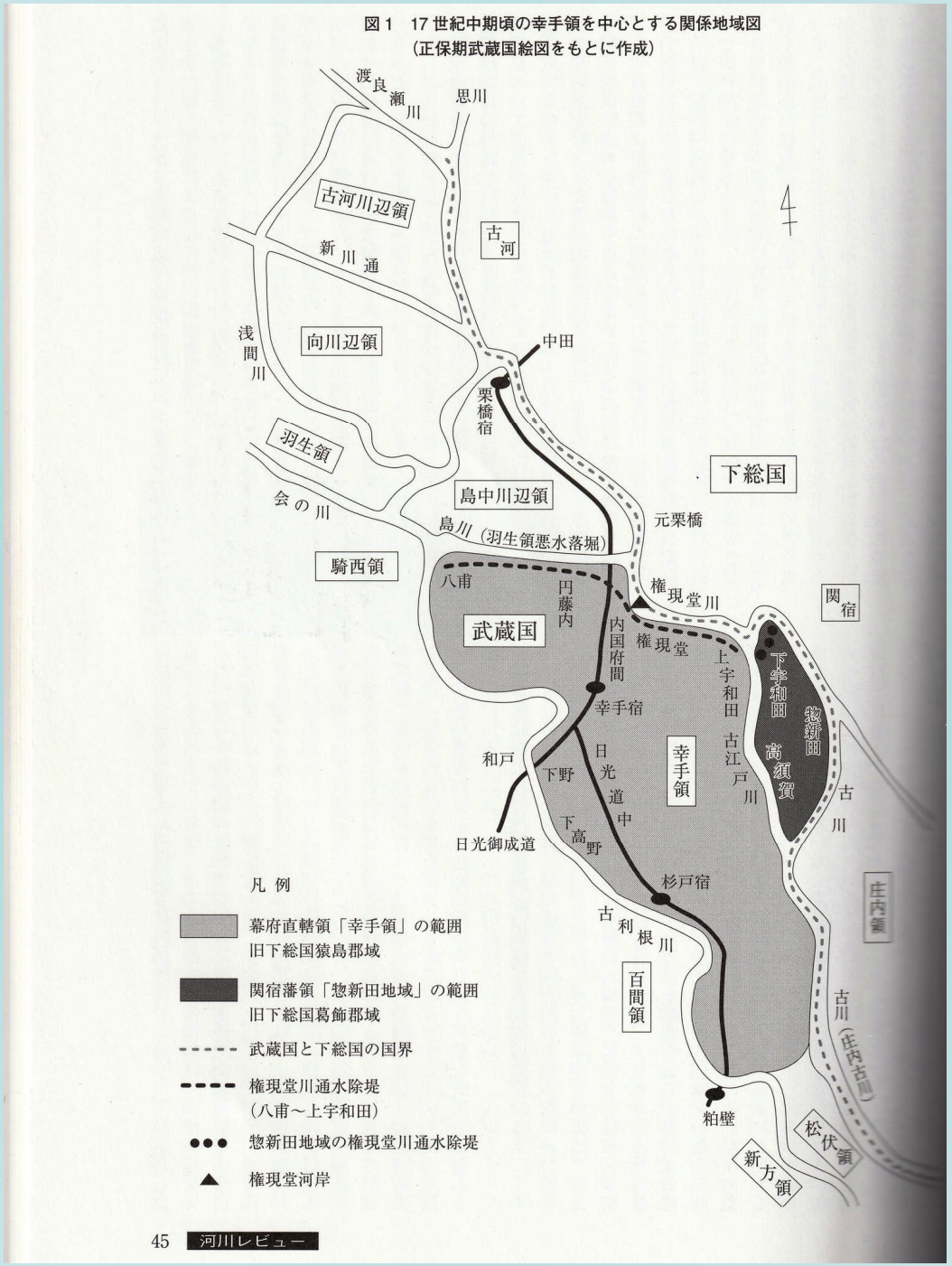
武蔵・下総の国境「移動」後
「2国」に存在した葛飾郡５／５

近世の葛飾郡幸手領の中で
江戸川(新利根川)と庄内古川新川と古江戸川で囲まれた
近世の武蔵国葛飾郡(関宿藩領)
惣新田村・下宇和田村・高須賀村は
寛文4年(1664)～享保16年(1731)に
下総国葛飾郡より
武蔵国葛飾郡になったと推定

※慶安2, 3年(1649, 50)頃完成の『正保(武蔵)田園簿』では
　同地域は既に武蔵国になっている

出典：原　太平(2002)『幸手市史　通史編Ⅰ』
　　幸手市教育委員会　pp. 358-387

図１　17世紀中期頃の幸手領を中心とする関係地域図
（正保期武蔵国絵図をもとに作成）



出典：

原 太平(2013)

「幸手領・惣新田地域の

開発・整備かたみた利根川東遷」

『季刊 河川レビュー』

新公論社 pp. 44-58

より 引用

ご清聴
ありがとうございました。